

王鐸書論訳注(二)

高津 孝・大野 繡暉

は対応できないため、『大漢和辞典』(大修館書店、二〇〇〇年)などの大型辞書の漢字番号を付すことで代用した部分もある。前稿「王鐸書論訳注(一)」が、劉正成「王鐸書論選注」の第一章の訳注で、本稿が、同第二章、第三章の訳注である。

本訳注は、『中國書法全集』(榮寶齋出版社、一九九三年)第六一・六二巻「王鐸」に付録として収録された劉正成「王鐸書論選注」に基づき、原文、訓読、訳文、注釈を施したものである。劉正成「王鐸書論選注」は、

王鐸の書作品、詩文集などから可能な限り書論に関する文章を抽出し整理

注釈を施した労作で、全体は三章に分かれ、第一章に一九条、第二章に一

八条、第三章に八条の書論を配する。しかしながら、校訂になお不十分な

点があり、原文については可能な限り原典に遡り、写真版などで確認を行

った。また、本訳注が個人のパソコンで原稿を作成しweb公開するため、

基本的には原文、訳註を旧字体としたが限界があることはご了承願いたい。

また、王鐸は特異な字体を使用することが多く、現在使用するフォントで

二

跋顏真卿爭坐位帖四則

1 一 (跋顏魯公爭坐位帖)

新舊唐書、皆無爭坐位、事僅見於石刻。俗又曰郭公為子儀、非也。代宗元泰元季三月、郭英又與裴冕同為右僕射、拜命集賢殿。中官觀軍容、始魚朝恩、英又、時提兵於陝、朝恩監之、與朝恩媿也久矣。魯公欲發憤非一日、特借善提寺行一事、折其怙寵驕蹇、曰坐位有序、尊朝廷、剛大禮、警冗上無等、曰銷朋黨之桀敖焉耳。鋤權璫曰折角、固魯公剛毅而曰禮為國、陰扶公室、弱曰強之、則忠臣苦心、世不及知也。令朝恩早從其意、不至輕玩唐天子。令英又早從其義、可免後日蜀中崔旰戮辱、滅頂之凶。噫、孰知其用心、足曰匡國、足曰弭禍也。觀玄宗時、河北二十四郡潰歸祿山、魯公先率夸原師、挫獨獍、各郡義於自公唱始、唐祚遂不墜。狀則公之忠憤、勇於襄王室、犯大難、折大敵、死竟不避、剛毅為國、獨善提寺行香坐位一事哉。

可見史之遺、不獨石刻、其失於公也必多矣。

今觀公書灑、根本二王、變化如龍、楷之精、行之神、書所造、深且如此。嗚呼、公書即不深造、獨足令人想見忠憤、況藝文又若斯乎。探它書補公遺事於唐書、能無望於後之苦心者歟。

跋顏真卿爭坐位帖四則

一（顏魯公の爭坐位帖に跋す）

新舊唐書、皆な爭坐位無し、事は僅に石刻に見ゆ。俗に又た郭公を目て子儀と為すは、非なり。代宗元泰元季三月、郭英又は裴冕と同じく右僕射と為り、集賢殿を拜命す。中官の觀軍容たるは、魚朝恩に始まる。英又は時に陝に提兵し、朝恩之を監し、朝恩と嫺なることや久し。魯公發憤せんと欲すること一日に非ずして、特に菩提寺行一事を借り、其の怙驕蹇を折るに、坐位に序有るを目てし、朝廷を尊び、大禮を甞らかにし、亢上し等無きを警し、目て朋黨の桀敖を銷（け）す。權璫を鋤（のぞ）くに折角を目てするも、固より魯公は剛毅にして禮を目て國を為（おさ）め、陰（ひそ）かに公室を扶（たす）け、弱きは目て之を強むるは、則ち忠臣の苦心にして、世の知るに及ばざるなり。朝恩をして早（つと）に其の意に従はしむれば、唐の天子を輕玩するに至らざらん。英又をして早（つと）に其の義に従はしむれば、後日の蜀中崔旰の戮辱、滅頂の凶を免かるべし。噫、孰れか知らん其の用心の目て國を匡（ただ）すに足り、目て禍（か）を弭（とど）むるに足るをや。玄宗の時を觀るに、河北二十四郡は潰へて祿山に歸す。魯公は先づ平原の師を率ゐて、獨狹を挫き、各郡の義於公の唱ふるより始まり、唐祚は遂に墜ちず。狀らば則ち公の忠憤は、王室を襄（たす）け、大難を犯すも、大敵を折るに勇にして、死も竟に避けず、剛毅にして國を為（おさ）むるは、獨り菩提寺行香坐位の一事のみならんや。見

るべし史の遺は、獨り石刻のみあらざるを、其の公に失するや必ず多し矣。今公の書灑を觀るに、二王に根本し、變化すること龍のごとく、楷は之れ精にして、行は之れ神にして、書の造（いた）る所、深（ふか）くして且つ此くの如し。嗚呼、公の書は即（たと）へ深造ならざるも、獨り人をして忠憤を想見せしむるに足る、況んや藝文の又た斯くの若きにおいてをや。它書を探り公の遺事を唐書に補へば、後の苦心する者に望み無きを能くせんや。

『新唐書』『旧唐書』にはともに争座位に関する記載がない。争座位の事は、ただ石刻だけに見える。俗にまた郭英又は郭子儀とみなすのは誤りである。代宗永泰元年（七六五）三月、郭英又は裴冕とともに右僕射となり、集賢殿を拜命した。宦官の觀軍容処置使は、魚朝恩から始まる。郭英又は時に兵を陝州に率い、魚朝恩がこの軍勢を統率し、郭英又は魚朝恩と親密な状態が長かった。顏真卿が憤りを発しようとしたことも一日だけのものではなく、特に菩提寺での行香にかこつけて、席次を乱した郭英又は魚朝恩に媚び諂った傲慢な態度を挫き、席には順序があることを理由に、朝廷を尊重し、国家の莊重な儀式の本質を明らかにし、思いあがって位階の等

級差を無くすことを誡め、それによって郭英乂らの党派を組んでの横暴で傲慢な振る舞いを一蹴した。顔真卿は雄弁で魚朝恩を排除したが、本来、顔真卿は剛直であり、礼で国家を治め、密かに唐王朝を助け、弱体化した唐王朝を強化したことは、顔真卿の国家運営に対する苦心惨憺であり、世間の人々はこれを知らない。もし魚朝恩が早くに顔真卿の意見に従っていたら、唐の天子を軽んじてもあそぶことはなかっただろう。もし郭英乂が早くに顔真卿の義に従っていたら、後日、蜀中の崔寧に自らが殺害される災いから逃れることができただろう。ああ、誰が知るのであろうか、顔真卿の苦心と骨折りが国を正すに十分であり、災いを止めるに十分であったということ。玄宗期を見るに、河北二十四郡が壊滅して、安祿山の手中に落ちてしまった。顔真卿は真つ先に平原郡の軍を率いて安祿山の猛勢を挫き、各郡の抵抗運動は顔真卿が唱えたことで始まり、唐王朝は結果的に陥落しなかった。であれば、顔真卿の忠義と憤懣、すなわち、王朝を補佐し、大いなる苦境にあっても、大敵を挫くことに勇気をふるい、死をも避

けず、剛直さで国家を統治したことは、ただ菩提寺での行香における坐位のことだけではない。歴史書の記載から漏れた事実は、この争坐位石刻だけに留まらないことを知るべきである。顔真卿の多くの功績は公的記録から多くが失われているのだ。

今、顔真卿の書を鑑賞するに、王羲之・王献之を基本とし、その変化は龍のようであり、楷書は精密で、行書は神品で、顔真卿が到達した書の境地はとても奥深く、しかもこのように素晴らしい。ああ、この顔真卿の書はたとえ深遠な境地に到達していなくとも、人に顔真卿の忠誠心と憤慨の様を想像させるに十分である。ましてこのように優れた芸術作品においてはなおさらであろうか。顔真卿の他の石刻書跡を探し出し、顔真卿の遺事を唐書に補えば、後世の国家運営に腐心する人々に期待できないことが有り得ようか。

注

一 (跋顔魯公争坐位帖) 『擬山園選集』(文集) 卷三十九・題跋二に収録。

顔真卿 顔真卿（七〇九七八五）、字は清臣、本貫は琅邪郡臨沂。開元二十年（七三四）の進士。忠臣として名高い。王羲之の書風と異なり、革新的な書風を開いた。

争坐位帖 『争坐位帖』（与郭僕射書、与郭英义論魚開府坐席書）は、代宗

広徳二年（七六四）に、顔真卿が右僕射郭英义に送ったとされる書翰の草稿。顔真卿五十六歳の作。祭姪文稿、祭伯文稿と併せて三稿と称される。

内容は、郭英义が天下観軍容処置使の宦官魚朝恩に諂い、朝廷の百官集会の席次を乱したことは、古来の礼制を乱すだけでなく、唐朝をも軽んじる行為だとした抗議文。

新舊唐書 『新唐書』『旧唐書』のこと。『新唐書』卷一五三、『旧唐書』卷一二八に顔真卿の伝記がある。王鐸が指摘するように、両者とも争坐位帖に関する内容は記されていない。

郭公 郭英义のこと。郭英义（？：七六六年）、字元武、瓜州常樂の人。郭英义は武將・郭知運の子。功績をあげて尚書右僕射・定襄郡王に至る。宰相の元載、天下観軍容処置使（総軍司令官）の宦官魚朝恩に取り入り、自身の地位を保持した。

郭子儀 郭子儀（六九七七八一）、唐代中期の武將、華州鄭縣の人。玄宗、肅宗、代宗、徳宗の四代に仕える。安祿山の乱の際、河東節度使李光弼と

ともに官軍を率いて活躍。後に、ウイグルの援軍を得て、七五六年に長安・洛陽を奪還。その後、宦官魚朝恩らにより失脚するも、代宗朝に再度登用され吐蕃の進行を防ぐ。徳宗即位後、汾陽王に封ぜられた。

代宗元泰元季三月 元泰は永泰の誤りであろう。季は年の異体字。

裴冕 裴冕（？：七七〇）、字章甫、河中府河東縣の人。唐朝宰相。門蔭により、渭南縣尉を授けられる。後に殿中侍御史、行軍司馬、御史中丞、中書侍郎になる。七五七年に尚書右僕射となる。長安・洛陽回復後、冀國公に封ぜられる。七五九年、再び尚書右僕射に任命される。七六四年には、尚書左僕射兼御史大夫となる。

同為右僕射 郭英义が右僕射に任命されたのは七六三年である。しかし、前述の「裴冕」の項で示したように、裴冕が右僕射として任命されたのは七五七年、七五九年である。この部分は王鐸の誤りか。

集賢殿 唐代に設置され、学士・正字などの官が存在し、典籍の集輯・刊行、散逸書の捜求などを行なう。宋代に集賢院と改称された。『旧唐書』本紀卷十一・代宗（永泰元年）三月壬辰朔、詔左僕射裴冕、右僕射郭英义、太子少傅裴遵慶、檢校太子少保白志貞、太子詹事臧希讓、左散騎常侍暢瑑、檢校刑部尚書王昂高昇、檢校工部尚書崔渙、吏部侍郎李季卿王延昌、禮部侍郎賈至、涇王傅吳令瑤等十三人、並集賢院待詔。」

中官觀軍容始魚朝恩 中官は宦官のこと。魚朝恩（七二二七七〇）、唐代宦官、瀘州瀘川の人。儒学、仏法、禪学をよくした。官は観軍容処置使となり大きな権力を有した。『旧唐書』本紀卷十・肅宗（乾元元年）九月庚午朔、……：以開府魚朝恩為観軍容使。』『新唐書』列傳第一百三十二・宦者上・魚朝恩「九節度圍賊相州、以朝恩為観軍容、宣慰、處置使。観軍容使自朝恩始。」

英义時提兵於陝 『旧唐書』本紀卷十・肅宗（乾元三年）四月……：庚申、

以右羽林大將軍郭英又為陝州刺史、陝西節度、潼關防禦等使。」

朝園監之 『旧唐書』本紀卷十一・代宗「(寶應元年)冬十月……戊辰

元帥雍王率諸軍進發、留郭英又、魚朝恩鎮陝州。」

嫗 慣れ近づく。『正字通』に「嫗、凡そ相狎する者、之を嫗と謂ふ。暱と通ず。」とある。

發憤 憤懣を露わにすること。『楚辭』九章惜誦「惜誦以致潛々、發憤以抒情。」

菩提寺行一事 菩提寺は、唐・高宗の永徽年間に菩提禪師朱智勳が責任者となり建立された。行とは行香のこと。外山氏によれば、香行は国忌行香のことで、天子や皇后の忌日に、都の道観・仏寺を指定して法要を行い、文武官が参集して焼香する行事のことであるという。参考文献：前掲『書道芸術 第四巻』

怙寵 寵愛に絶ること。『後漢書』朱暉傳「恃勢怙寵之輩、漁食百姓。」

驕蹇 傲慢。『公羊傳』襄公十九年「為其驕蹇、使其世子處乎諸侯之上也。」

大禮 国家の重大な儀式。『禮記』樂記「大樂與天地同和、大禮與天地同節。」

無等 等級がないこと。『禮記』内則「羹食、自諸侯以下至於庶人無等。」

朋黨 集団、派閥。『戰國策』趙策二「臣聞明王絶疑去讒、屏流言之跡、塞朋黨之門。」

桀敖 凶暴で傲慢なこと。『漢書』匈奴傳贊「匈奴人民每來降漢、單于亦輒

拘留漢使以相報復、其桀敖尚如斯、安肯以愛子而為質乎。」

焉耳 感嘆の語義の助字。

權璫 権力を有した宦官。明劉元卿『賢奕編』方正「吳司空公廷舉、筮仕

順德、有權璫市葛於縣、公用其值買二疋送之。」

剛毅 意思が堅く不屈であること。『禮記』中庸「發強剛毅、足以有執也。」

曰禮為國 礼で国を治める。『論語』先進「為國以禮、其言不讓、是故哂之。」

公室 王室。『論語』季氏「孔子曰、祿之去公室五世矣、政逮於大夫四世矣。」

苦心 苦慮。『莊子』漁夫「苦心勞形、以危其真。」

輕玩 見下して蔑ろにする。宋蘇軾・論綱梢欠折利害狀「臣竊見近日官私

例皆輕玩國法、習以成風。」

蜀中崔旰 崔寧のこと。崔寧(七二二-七八三)、崔旰とも称す。貝州安平の

人。唐の將軍、宰相。永泰元年(七六五)五月、郭英又が嚴武の後任とな

り、崔旰を殺そうと謀る。閏十月、崔旰が成都尹・劍南節度使の郭英又を

殺害。柏茂林、楊子淋等が拳兵して崔旰を討ち、蜀中が乱れた。

戮辱 刑を与えて辱めること。『韓非子』難言「然則雖賢聖不能逃死亡避戮

辱者、何也。」

滅頂之凶 身を滅ぼすこと。『易経』大過「過涉滅頂、凶、無咎。」

用心 苦心と劳心。『論語』陽貨「飽食終日、無所用心、難矣哉。」

匡國 国家を正すこと。漢蔡邕「上封事陳政要七事」「夫書畫辭賦、才之

小者、匡國理政、未有其能。」

禍 禍。『玉篇』「神不福也。今作禍。與禍同。」

獨獺 獨は、夷(えびす)の別名。『集韻』「獨、虜別號。」獺は、犬。『集

韻』「犬也。」

義於 於是、旌の異体字。『廣韻』「同旌。」義於是義旗。正義の旗。

唐祚 唐の天子。

大難 大きな災難。『易経』明夷「内文明而外柔順、以蒙大難、文王以之。」

想見 想像。『史記』孔子世家論「餘讀孔氏書、想見其為人。」

忠憤 忠義と憤懣。『魏書』刁衝傳「衝乃抗表極言其事。辭旨懇直、文義忠

憤。」

坐位帖多漫滅者、歳久石漸磨、已足使人踴躍。觀斯冊、煥然照人目睛、奪人神意、毫髮畢出、如龍戲海、出沒變化、莫知所至、觀止矣。二王、顏清臣皆升堂入室、後無繼者、宇宙内不可易得也。崇禎七年八月燈下跋。雨恭年兄秘藏、勿輕令人見之。王鐸。

坐位帖の漫滅する者多く、歳久しく石漸く磨するも、已（はなは）だ人をして踴躍せしむるに足る。斯の冊を觀るに、煥然として人の目睛を照らし、人の神意を奪ひ、毫髮にも畢く出で、龍の海に戯れ、出沒變化し、至る所を知る莫きが如くして、觀止なり矣。二王、顏清臣皆な升堂入室にして、後に繼ぐ者無く、宇宙の内を得ること易かるべからず。崇禎七年八月燈下に跋す。雨恭年兄秘藏して、輕しく人をして之を見せしむること勿れ。王鐸。

争坐位帖は摩滅したものが多く、長い年月が経過して石が次第に擦り減ったが、今でも人を奮い立たせるには十分だ。この冊を鑑賞するに、その輝きが人々のひとみを照らし、人々の心を奪い、顏真卿の精神筆力が細かな線にもよく表れており、龍が海で遊び戯れ出沒變化し、その行く先は知るべくもないようであり、最高の名品である。王羲之・王猷之、顏真卿は皆な本質に到達し、後世彼らに続く者が存在せず、天地の間において簡単には得難い人物である。崇禎七年（一六三四）八月、灯火の下で跋す。宋権の秘藏であり、不用意に人にこの帖を披露してはならない。王鐸。

注

二 本跋は、京都の藤井斉成会有鄰館所藏の争坐位帖拓本に朱書で施され

た跋文である。『書道藝術 第九卷』（中央公論社、一九七六）に収録の図版九六「争坐位帖跋」に拠った。原本は「無」字下に「斷」字があるが、傍点を施し見せ消ちとなっている。

漫滅 摩滅『後漢書』文苑傳禰衡「始達潁川、乃陰懷一刺、既而無所之適、至於刺字漫滅。」

踴躍 心が奮い立つ。『詩經』邶風擊鼓「擊鼓其鐘、踴躍用兵。」

煥然 光り輝くさま。漢・司馬相如「大人賦」「煥然霧除、霍然雲消。」

目睛 目。漢・王充『論衡』書虛「今顏淵用目望遠、望遠目睛不任、宜盲眇。」

神意 気持ち。

毫髮 毛髮。宋・蘇軾・秦太虛題名記「是夕天宇開霽、林間月明、可數毫髮。」

米芾『玉堂待訪錄』に「王右軍蘭亭集序右唐粉蠟紙雙鈎摹本、在蘇澈處、精神筆力毫髮畢備、下真跡一等。此幾馮承素輩拓賜大臣者、舜欽父集賢校理者購於蜀僧元靄、某與澈友善、每過、公必一出、遂親為范肩飾」とある。

觀止 最高級のもの。『左傳』襄公二十九年「見舞韶箛者、曰……觀止矣。若有他樂、吾不敢請已。」

升堂入室 学芸が奥深い境地に達すること。『論語』先進「由也升堂矣、未入於室也。」

宇宙 天地。『莊子』讓王「餘立於宇宙之中、冬、日衣皮毛、夏日衣葛絺、春耕種、形足以勞動、秋收斂、身足以休食、日出而作、日入而息、逍遙於天地之間。」

雨恭年兄 宋権（一五九八〜一六五二）、字は雨恭、河南商邱の人。天啓五年の進士。明清両朝に仕え、順治三年に国史院大学士になる。『清史列伝』

卷七十八に伝記がある。年兄とは、同年の科挙に及第した者同士が用いる

敬称のことだが、王鐸は天啓二年の進士である。

3 三

清臣行草若不經意、往往鼓吹山陰父子及晉、齊諸家、此帖神全氣周、不見石斑剝蝕、身無芥瘍之患、與澄師、李夫人二帖同。獨是爭軍容魚朝恩坐位、侃侃於郭令公之前、偉哉、勁氣凌千古矣。王元美曰、顏書為書家□□□其人品亦唐室鐵骨力也。獨怪令公坐位一事、唐書不載、其有意諱其短耶。而此帖流於後、從來寶物□□正氣、埋之崖土、沉之江水、欲不發光怪、得乎。清臣地下聞予此言、應為之折屐矣。兩恭老年兄命題。王鐸。

清臣の行草は經意せざるが若きも、往往にして山陰父子及び晉、齊諸家を鼓吹す、此の帖は神は全くして氣は周く、石斑剝蝕を見ず、身に芥瘍の患無く、澄師、李夫人二帖と□同じきも、獨り是れ軍容魚朝恩の坐位を争ひ、郭令公の前に侃侃たりて、偉なるかな、勁氣千古を凌ぐ矣。王元美曰く、顏書は書家の□□□為りて、其の人品も亦た唐室の鐵骨力なり、と。

獨り怪しむ令公坐位の一事、唐書に載せざるを、其れ意有りて其の短を諱むか。而るに此の帖は後に流し、從來寶物は□□正氣ありて、之を崖土に埋め、之を江水に沉め、光怪を發せざらんと欲するも、得んや。清臣地下に予が此の言を聞かば、應に之が為に折屐すべし矣。兩恭老年兄題せんことを命ず。王鐸。

顏真卿の行草は意図したものではないようだが、しばしば王羲之・王獻之、晋や齊の諸家の書法を展開している。この帖は、顏真卿の精神、氣力が完璧に充ちており、石のまだら模様や剝落浸食も見られず、本体に皮膚病のようなふくらみも無い。「華嚴帖」「與夫人」の二帖と□同じであるが。ただ彼だけが魚朝恩の坐位について争い、郭英父の前でも剛直な態度を取っており、偉大である。彼の氣概は彼以前の全ての歴史上の人物を凌駕している。王世貞は次のように述べている。顏書は書家の□□□であり、その人品も同様に唐王朝の強靱な力だ、と。ただ郭英父との争坐位の件が唐書に記載されていないことは疑問である。これは何かしらの意図をもって顏真卿の短所を憚ったのか。ところが、この帖は後世に伝わった。從來より寶物は□□正氣を有し、これを崖に埋め、これを長江に沈め、怪異な現象を發生させないようにしようとしても、出来るわけがない。顏真卿が地下で私のこの言葉を聞けば、きっとこのために狂喜したはずだ。宋権が私に跋文を書くよう命じた。王鐸。

注

三 京都の藤井齊成公有鄰館所蔵の争坐位帖拓本に加えられた跋文である。

『書道藝術 第九卷』（中央公論社、一九七六）に収録の図版九六「争坐位帖跋」に対する解説の図版二〇「王鐸 争坐位帖題簽・跋」に拠った。原本の損傷により解説できない部分は□としている。

不經意 注意を払わない。宋 陸游『老學庵筆記』卷五「元用素強記、即朗誦一再。王肅不視、且聽且行若不經意。」

鼓吹 推し広める。唐・杜甫・進雕賦表「則臣之述作、雖不足以鼓吹六經、至於沉鬱頓挫、隨時敏捷、而揚雄、枚皋之流、庶可跂及也。」

山陰文字 王羲之・王献之のこと。山陰は王羲之の別称。

剝蝕 剥落。宋 陸游『老學庵筆記』卷四「漢隸歲久風雨剝蝕、故其字無復鋒銳。」

芥瘍 疥瘡と腫瘍。

與澄師 顔真卿の「華嚴帖」のこと。「與澄師帖」とも言う。澄師大德待者に送った書簡。この帖は「忠義堂帖」、「戲鴻堂帖」に刻入されている。文は『顔魯公文集』、『全唐文』に収録。

李夫人 顔真卿「與夫人帖」のことか。「頓首夫人帖」とも言う。「忠義堂帖」に刻入。文は『顔魯公文集』、『全唐文』に収録。文末に「夫人閣下」と記載されるだけで、宛先は不明。米芾『書史』に「又有与夫人帖一幅、当是其嫂。」の記載があり、米芾は夫人を顔真卿の嫂としている。

侃侃 剛直。侃侃とも書く。『新唐書』陳廷老傳「在公卿間、侃侃不幹虚譽、推為正人。」

郭令公 郭英父のこと。

勁氣 気概。唐・韓愈・上襄陽於相公書「正聲諧韻、勁氣沮金石。」

千古 長い年月。北魏・酈道元『水經注』睢水四「追芳昔娛、神遊千古、故亦一時之盛事。」

王元美 王世貞。王世貞（一五二六～一五九〇）、字は元美、号は弇州山人。

江蘇太倉の人。李攀龍らを含む後七子の代表的な存在。著作は、『芸苑卮言』、『弇州山人四部稿』等。

顏書為書家 □□□、其人品亦唐室鐵骨力也。王世貞『弇州續稿』卷百六

十七・又顔帖「書家鐵手腕當推顔魯公第一、如前數帖皆稿草、不經意而天真爛然、往往有步武山陰意。至於文則愈纂改而愈不快、人有不勝其絮與香拓者、何也。魯公在唐舉制科、中文詞清麗科、此尤不可曉。」後半部分は「四」の跋文中で踏まえられている。

諱其短 『孔子家語』卷二・致思「與人交、推其長者、諱其短者、故能久也。」

江水 長江。『淮南子』墜形訓「何謂六水。曰河水、赤水、遼水、黑水、江水、淮水。」高誘の注に「江水出岷山。」とある。

光怪 怪異的な現象。漢・荀悅『漢紀』高祖紀一「嚙從王媪、武負貫酒、每飲醉、留寢其家、上嚙見光怪、負等異之。」

折屐 狂喜。『晉書』謝安傳「玄等既破堅、有驛書至、安方對客圍碁、看書既竟、便擲放牀上、了無喜色、某如故。客問之、徐答云、小兒輩遂已破賊、既罷還內、過戶限、心喜甚、不覺屐齒之折。」

4 四

讀清臣文集、詩文甚寂寂、尺牘繁而沓拖。既舉制科、又入文辭清麗科、亦不能兼長耶。書邊何間然乎。甲戌鞠月、弟王鐸跋。

清臣の文集を讀むに、詩文は甚だ寂寂たるなり、尺牘は絮にして沓拖なり。既に制科を擧げられ、又た文辭清麗科に入るも、亦た兼ねて長ずること能はざるか。書邊は何ぞ間然たらんや。甲戌鞠月、弟王鐸跋す。

顏真卿の文集を讀むに、詩文ははなはだ華やかさを欠き、尺牘に關しては回りくどく明瞭でない。制科に及第し、更に文辭清麗科に合格したが、文学と書法の才能は兼ね備えることはできないのか。書法に關しては非難すべき点はない。崇禎七年（一六三四）九月、王鐸跋す。

注

四 三に同じ。

寂寂 静寂で音がなない。三國・魏・曹植・釋愁文「愁之為物、惟惚惟恍、不召自來、推之弗往、尋之不知其際、握之不盈一掌。寂寂長夜、或羣或黨、去來無方、亂我精爽。」

絮 ぐどい。『通俗編』言笑「今又以言語煩瑣為絮。」

沓拖 はつきりしていない。沓は、踏の異体字。宋趙長卿「驀山溪遺懷」詞「學此沓拖、也似沒意志。詩酒度流年、熟諳得、無爭三昧。」

制科 制科は臨時で天子が制詔を發し、在官在野を問わず人材を推薦させ、天子が合否を判断する。

文辭清麗科 唐・殷亮・顏魯公行狀「天寶元年秋、扶風郡太守崔瑒舉博學文詞秀逸、元宗御勤政樓、策試上第。」

間然 欠点を指摘して非難する。『論語』泰伯「子曰、禹、吾無間然矣。非飲食、而致孝乎鬼神、惡衣服、而致美乎黻冕、卑宮室、而盡力乎溝洫。禹、

吾無間然矣。」

鞠月 菊月。陰曆九月。

5 跋戲魚堂帖

虞山錢牧齋示予戲魚堂帖一冊、予驚異之。戲魚堂帖六季冬勒石也。前乃獻之十三行小楷、未載寶曆元季正月、起居郎柳公權記、下即罔極帖、楷書擬鍾太傅、餘與淳化大觀同。寒涼雨中二帖、諸帖所不載也。蓋戲魚刻邊細潤、無奮末猛起之習。書雖遊藝一事、豈道焉。結構深造、觀其波磔遺萬、宛然具存、為之斂衽。夫牧齋詩文弓夷正大、求考古人。晚益嗜字邊。借令獲觀全帙、滄海汪洋之中靈奇畢陳、其為予斂衽而驚異者、又何可道焉。

戲魚堂帖に跋す

虞山錢牧齋予に戲魚堂帖一冊を示す、予は之に驚異す。戲魚は淳熙六季冬に勒石するなり。前は乃ち獻之十三行小楷にして、末に寶曆元季正月、起居郎柳公權記すと載す。下は即ち罔極帖、楷書は鍾太傅に擬（なぞら）ふ、餘は淳化大觀と同す。寒涼雨中の二帖、諸帖載せざる所なり。蓋し戲魚の刻邊は細潤にして、奮末猛起の習無し。書は遊藝の一事と雖も、道豈有り。結構深造にして、其の波磔を觀るに、遺萬宛然として具（つぶさ）に存すれば、之れが為に斂衽す。夫れ牧齋の詩文は弓夷正大にして、古人を求む。晚に益々字邊を嗜む。借令（もし）全帙を獲觀すれば、滄海汪洋の中に靈奇畢く陳（つら）ならん、其の予が斂衽して驚異する者為（た）るは、又た何ぞ道ふべけんや。

錢謙益は私に戲魚堂帖の一冊を示した。私はこの戲魚堂帖に驚嘆しその

存在を不思議に思った。この戯魚堂帖は南宋の淳熙六年（一一七九）の冬に勒石したものである。冒頭は王献之「洛神賦十三行」である。作品の末に「寶曆元年正月、起居郎柳公權記」と記載されている。下は罔極帖であり、楷書は鍾繇に似ている。残りは「淳化閣帖」「大観帖」と同じである。寒涼帖・南中帖は、諸帖に収録されていない。思うに戯魚堂帖の刻法は細やかで潤いがあり、全身を奮い立たせるような猛烈な習癖はない。書は娯楽の一つではあるが、そこには道（真理）が存在する。文字の構造、配列は奥深い境地に到達しており、その書法の筆面を見ると、二王の残された規範が明確にことごとく備わっている。私はこの為に襟を正して気持ちを引き締めるのである。そもそも、錢謙益の詩文は平易で公明正大であり、古人を目標としている。晩年になっていよいよ書法を嗜むようになった。もし全帙を手に入れ見る機会があるならば、大海原の中で神秘的現象が連なり出現したかのようであろう。この法帖に対して、私が襟を正して拝見し驚嘆してその存在を不思議に思ったのは、言うまでもないことである。

注

跋戯魚堂帖 『擬山園選集』（文集）卷三十八・題跋一に収録。宇野雪村『法帖事典』（雄山閣、一九八四）によれば、戯魚堂帖とは、元祐年間に劉次莊が家蔵の淳化閣帖十巻を模刻し、巻尾の篆題を除去して釈文を増刻したといわれるものという。清江帖、臨江帖とも称される。容庚『叢帖目』では、偽刻本としている。奘は魚の異体字。

虞山錢牧齋 錢謙益（一五八二—一六六四）、明末清初の詩人、学者。字は受之。号は牧齋。江蘇常熟の人。出身地にちなみ虞山とも称される。萬曆三

十八年の進士。吳偉業、龔鼎孳らとともに江左の三大家と呼ばれる。**獻之十三行小楷** 王献之「洛神賦十三行」のこと。宇野雪村『法帖事典』容庚『叢帖目』によれば、「戯魚堂帖」第七の冒頭が「洛神賦十三行」であるという。

寶曆元年正月、起居郎柳公權記 参考として、『中国法書選十一 魏晉唐小楷集』（二玄社、一九九〇）収録の王献之「洛神賦十三行」（越州石氏本）では、「寶曆元年正月廿四日、起居郎柳公權記」と記載される。

罔極帖 王羲之の草書の尺牘。宇野雪村『法帖事典』によれば、「戯魚堂帖」第五に収録されるという。しかし、容庚『叢帖目』では『戯魚堂帖』の目錄中に「罔極帖」は見えない。また、宇野と容庚が示す『戯魚堂帖』第五の収録作品には相違が見られる。

大観 「跋淳化帖」注の「蔡京大観、留禧太清樓續閣帖」項参照。

寒涼南中 「寒涼」は、『王羲之王献之全集箋注』（山東文芸出版社、一九

九九年）王献之・書信七八「日寒涼……」。『南中』は、同書王献之・書

信八九「南中佳音……」。

細潤 きめ細かで潤滑している。『太平寰宇記』河南道五潁陽「北岸有沙

細潤可以澡濯。」

奮末猛起 奮末は、四肢を揺れ動かす。猛起は、勇猛。『禮記』樂記「粗厲、

猛起、奮末、廣賁之音作、而民剛毅。」

遊藝 娛樂。

深造 奥義を会得する。『孟子』離婁下「君子深造之以道 欲其自得之也」

趙岐の注に「造、致也。言君子學問之法、欲深致極竟之、以知道意。」と

あり、朱熹の集注に「深造之者、進而不已之意。」とある。

波瀾 ここでは一般的に書法の筆画を指す。

萬 規範。『韻會』「果羽切、音矩。義同。」

宛朕 はっきり。『關尹子』五鑒「譬猶晝游再到、記憶宛然、此不可忘、不可遣。」

斂衽 襟を正し、慎み敬う。『戰國策』楚策一「二國之風、見君莫不斂衽而拜、撫委而服。」

亏夷 平易。亏は、平の異体字。

正大 意志や言動が正々堂々として立派な様。

滄海 大海。漢・董仲舒「春秋繁露」觀德「故受命而海内順之、猶罔星之共北辰、流之宗滄海也。」

汪洋 広大で果てしない。水の勢いが盛んなことをいう。『楚辭』王褒「九懷」蓄英「臨淵兮汪洋、顧林兮忽荒。」

靈奇 神奇。『藝文類聚』卷八四に引く漢・朱仲「相貝經」に「皇帝、唐堯夏禹三代之貞端、靈奇之祕寶。」とある。

嗽 つらねる。『説文』「嗽、剝也。从支陳聲。」

6 跋聖教序四則

一 (跋聖教序)

聖教之斷者、余季十五、鑽精習之。今入都、觀今礎所育與予所得者、子冊更勝也。將歷三十季、如天宮星躔、起止次舍、豈益益昧、殆杖而後行、轉以自枳。可見逸少之書與淳化帖玄微渾化、信學書者之潭奧矣。其珍摹靈林、勿褻此寶。昔人云、仙芝煩弱、既匪足譬蟲虎瑣碎、又安能匹。時取而味之終身焉。以測天者步、此冊可也。

一 (聖教序に跋す)

聖教の斷てる者、余が季十五にして、鑽精して之を習ふ。今都に入り、今礎の育する所と予の得る所の者とを觀(み)るに、予の冊更(さら)に勝る。將に三十季を歷んとするに、天宮の星躔の起止次舍するが如し、豈(とき)に晷(ひかげ)に益々昧(めくら)く、殆ど杖つきて後に行き、轉(ころ)びて以て自ら枳(そこな)ふ。逸少の書と淳化帖とは玄微渾化にして、信に書を學ぶ者の潭奥なるを見るべし。其れ珍摹靈林にして、此の寶を褻(あなど)ること勿かれ。昔人云く、仙芝は弱きを煩ひ、既に譬(ひと)しくするに足らず。蟲虎は瑣碎にして、又た安くぞ能く匹(たぐひ)せんや、と。時に取りて之を味わふこと終身なり。天を測る者の歩みを以てすれば、此の冊は可なり。

集字聖教序の碑が断裂した後に採拓された法帖を、私は十五歳の時に深く研究し学んだ。現在、北京に来て、宋之譜所有の聖教序と私が得た聖教序とを比べて見たが、私の方がよりいっそう優れていた。十五歳の時から三十年が経過しようとしているが、それは天上の日月星辰が動いたり止まったり休んだりするようなものだ(天体の運行が一律順調なものではない

ように、私の学書も紆余曲折があった。現在、日陰ではますます目が見えなくなり、ほとんど杖をついて歩き、ころんで自ら怪我をするようになった。(聖教序の) 王羲之の書と淳化閣帖とは深遠な真理が一体化しており、これらは、本当に書を学ぶ者に対する奥深い内容を持つ手本であることがわかる。集字聖教序は貴重な摹本で優れた王羲之書の集成であり、この宝を軽視してはならない。昔の人(鮑照)は、(飛白書を賞賛して)「仙人書や芝英書という字体は弱々しさが欠点で並べて論するに足らず、虫書・虎爪書はこまごまとしてばらばらであり、どうして飛白書に匹敵しようか」と言った。私は、時に聖教序を取りだしては賞玩すること生涯に及ぶ。天体を観測する者の歩みをもってすれば、この聖教序は学ぶにふさわしい法帖である。

注

一 (跋聖教序) 『擬山園選集』(文集) 卷三十八・題跋一に収録。聖教序は、唐時代の僧・懷仁(生卒年不詳)が、王羲之の字を集めて刻した石碑。集字聖教序、集王聖教序などと呼ばれる。内容は、玄奘法師の仏教漢訳事業を称えた唐太宗の序文、高宗の序記、般若心経からなる。王鐸は、四三歳、崇禎七年(一六三四)四月に北京に入り、四四歳、崇禎八年(一六三五)十一月に南京に赴任しているので、本跋はおそらく崇禎八年の作であろう。聖教之斷者 原碑は宋代以降に断裂したとされ、断裂以前の宋拓が良いとされる。

今礎 『王鐸年譜長編』一冊によれば、宋之譜、字は今礎、号は岱雲。山東沂州の人。崇禎元年の進士。『(民国)臨沂縣志』卷九・人物一に伝記があるという。

星躔 日月星辰の運行の位置。南朝梁武帝閻闔篇「長旗掃月窟、鳳跡輾星躔。」

次舍 宮中の宿衛が休息する所。『周禮』天官宮伯「授八次八捨之職事。」

鄭玄注「鄭司農雲、庶子衛王宮、在內為次、在外為捨、次、其宿衛所在捨、其休沐之處。」

枳 そこなう。『小爾雅』「枳、害也。」

玄微 奥深く微妙なこと。深遠 晉袁宏『後漢紀』明帝紀下「有經數千萬……世俗之人以為虛誕、然歸於玄微深遠、難得而測。」

渾化 一体化。明王守仁『傳習錄』卷中「來書雲、質美者、明得盡、查滓使渾化。」

潭奥 家の奥の間。深奥の所。西晉・郭璞・爾雅序「誠九流之津涉、六藝之鈐鍵、學覽者之潭奥、摛翰者之華苑也。」

仙芝 仙人の書。南朝・宋・鮑照「飛白書藝銘」「絲髮垂垂、平理端密。盈尺錦兩、片字金溢。故仙芝煩弱、既匪足雙；蟲虎瑣碎、又安能匹。君子品之、是最神筆。」

蟲虎 虫書と虎爪書の総称。南朝梁・蕭子良『古今篆隸文體』参照。

瑣碎 細々と煩わしい。晉葛洪『抱樸子』百家「或詩賦瑣碎之文、而忽子論深美之言。」

7 二(跋聖教序帖)

聖教近多木刻、蘇人售都下、往往得重寶、乍觀之、若大疑獄、細審拂策、磔掠之間、細瘦腫肥不同、茲故、佳帙譬之龍螭春動、鱗甲生活、挾育靈氣、不至怒而攫人破壁也。

二（聖教序帖に跋す）

聖教は近ごろ木刻多し、蘇人は都下に售（う）り、往往にして重賈を得たり。乍ち之を觀るに、大なる疑獄の若く、細かに拂策磔掠の間を審らかにして、細瘦腫肥同じからず、茲の故に、佳帙は之を譬ふれば、龍螭春動、鱗甲生活するがごとく、靈氣を挾育するも、怒して人を攫（つか）み壁を破るに至らざるなり。

近頃、聖教序の拓本は木刻が多く、蘇州の人はそれを北京で売り、しばしば大金を得ている。はじめてこの木刻聖教序を詳しく見、証拠不十分で判決の下しがたい難事件のように、仔細に拂・策・磔・掠の間を取り調べたところ、線の細さ太さが石刻とは異なっていた。この故に木刻本の良いものは、これを例えるなら、龍やみずちが春に動き、鱗と甲羅をもつ生物が生き生きと活動するようであり、優れた気質はあるが、怒りに任せて人を掴み、壁を打ち破って天に上るような霸氣あるものには到達していないのである。

注

二（跋聖教序帖） 『擬山園選集』（文集）卷三十八・題跋一に収録。

都下 都。『三國志』吳志呂據傳「又遣從兄憲以都下兵逆據於江都。」

重賈 重資。大金。多額の金額。『南齊書』竟陵文宣王子良傳「又司市之要

自昔所難。頃來此役、不由才舉、竝條其重賈、許以賈衡。」

乍觀 乍看と同じ。

疑獄 罪の当否を判断し難い裁判事件。『禮記』王制「疑獄、汜與眾共之、

眾疑赦之。」

孔穎達疏「疑獄、謂事可疑難斷者也。」

拂 永字八法に「拂」はない。劉正成は、「掠（左はらい）」に近い意味だ

としている。

策 永字八法の一つ。「右上がりの横画」のこと。

磔 永字八法の一つ。「右はらい」のこと。

掠 永字八法の一つ。「左はらい」のこと。

細瘦 瘦せ細り、虚弱な様。

腫肥 浮腫んで、肥える様。『証類本草』「食醫心鏡、主水鼓石水、腹脹身

腫肥。」

螭 伝説中の角がない龍。みずち。

鱗甲 鱗と甲羅をもつ生物。漢蔡邕・漢津賦「鱗甲育其萬類兮、蛟螭集以

嬉遊。」

靈氣 他よりも優れて美しい氣質。晉傅玄・鴻雁生塞北行「退哀此秋蘭

草根絶、隋化揚。靈氣一何憂（優）美、萬里馳芬芳。」

破壁 画竜点睛の故事。唐張彦遠『歷代名畫記』張僧繇「金陵安樂寺四白

龍、不點眼睛。每雲、點睛即飛去。人以為妄誕、固請點之。須臾、雷電破

壁、兩龍乘雲騰去上天、二龍未點睛者見在。」

闕者、若疑、添、神、骨、合、紛、糺、殫、讚、准、教、正、異、何、目、

空、共闕十六字。茲冊十六俱備、紛糺二字、較諸本獨善、上記玄晏圖書

乃孫聞斯家藏也。予館師聊城參水朱公跋、謂為韓太史所餉、潔淨淳古、無

胥嚙缺。此帖為宋榻無疑矣。學者因此冊目想見落墨初意、何難入羲之之堂

乎。牧齋寶此、豈淺之乎。為嗜好者、香斯卓*人也。奏疏鱗立、未竟厥志、

手書猶存。甲申、乙酉、乾傷坤毀、文獻寥寥、而茲冊獨善無凋損、何耶。

天下物育幸不幸、所從來久矣。予題為第一聖教序、它日至拂水山房、問猶

（能作賦詠之。

三（聖教序に跋す）

聖教序は貞觀廿二年八月に作り、咸亨三季十二月に建つ。刻工は獨り精

邁為り。斷後に闕くる者は、疑、添、神、骨、合、紛、糺、殫、讚、准、

教、正、異、何、目、空の若く、共に十六字を闕く。茲の冊は十六俱に備

ふ。紛糺の二字、諸本に較べ獨り善し。上に玄晏齋圖書と記す、乃ち孫聞

8 三（跋聖教序）

聖教序作於貞觀廿二年八月、建于咸亨三季十二月、刻工獨為精邁。斷後

斯の家藏なり。予の館師聃城蓼水朱公の跋に、韓太史の餉（おく）る所と
為り、潔淨淳古にして、嚙缺育る無し。此の帖宋榻為（た）るは疑ひ無し
と謂ふ。學ぶ者は此の冊に因りて曰て落墨の初意を想見すれば、何ぞ羲之
の堂に入り難からんや。牧齋の此を寶とするは、豈に之を淺しとせんや、
嗜好と為す者として、聃斯は卓*の人なり。奏疏 鱷立するも、未だ厥の志
を竟（と）げず、手書は猶ほ存す。甲申、乙酉、乾は傷（そこな）ひ坤は
毀（こわ）れ、文献寥寥たり、而れども茲の冊は獨り善く凋損無きは、何
ぞや。天下の物は幸不幸育り、從來する所久し矣。予題して第一聖教序と
為す、它日拂水山房に至り、問（まま）猶ほ能く賦を作りて之を詠ぜん。

聖教序碑は貞觀二十二年（六四八）八月に作られ、咸亨三年（六七二）
十二月に（長安の弘福寺に）建てられた。刻者は非常に優れた人物である。

断裂後に欠けた字は、「疑」、「添」、「神」、「骨」、「合」、「紛」、「糺」、「殮」、
「讚」、「准」、「教」、「正」、「異」、「何」、「巨」、「空」で、共に十六字を欠

く。この聖教序は十六文字がすべて備わっている。「紛糺」の二字は、諸本
に比べてとりわけ優れている。上に「玄晏齋圖書」と記されており、孫聞
斯の家藏である。私の館師である朱延禧の跋に、「韓太史から贈与されたも
のである。さすがしく古風で、齧られたり欠けたりした部分が無い。こ
の帖は宋榻本で間違いない」と言う。學ぶ者は、この聖教序によつて王羲
之の書が書かれた時の筆意を想像すれば、王羲之の書の本質に入ることが
どうして困難であろうか。錢謙益がこれを宝物としているのは、重要視し
ているからだ。書の愛好者として孫聞斯は、格別に優れた人物である。上
奏文で正論を主張したが、その志を遂げることなく没した。彼の自筆の文
書は今も残されている。崇禎十七年（一六四四）、順治二年（一六四五）、
天下は戦火を被り、文献は失われ、ほんのわずかしか残されていない。と
ころが、この冊はとりわけ素晴らしい状態で衰えや損傷もないのは、どう
してであろうか。天下の物には、幸不幸があり、昔からずっとそうである。
私はこの聖教序に題して「第一聖教序」と書き付けた。いつの日か、錢謙

益の蔵書樓に赴き、時に賦を作つてこの聖教序冊の素晴らしさを詠うことができればと思う。

人。萬曆二十三年（一五九五）の進士。翰林院檢討を授けられ、後に礼部右侍郎となる。

注

三（跋聖教序） 『擬山園選集』（文集）卷三十八・題跋一に収録。『王鐸年

潔淨 清潔。『初刻拍案驚奇』卷二七「王公自到大街坊上尋得一所宅子、寬敞潔淨、甚足像意。」

譜長編』第二冊によれば、錢謙益所蔵の聖教序に跋したものであるという。

淳古 純朴古朴。唐高適「留上李右相」詩「風俗登淳古、君臣挹大庭。」

上記玄晏齋圖書、乃孫蘭斯家藏也 孫慎行、字は聞斯、号は淇澳、常州武進

嚙缺 虫食いや欠損。

の人。万曆二十三年（一五九五）考試の探花。翰林院編修を授かる。累遷し

落墨 筆を取つて書き始めること。宋蘇軾「山茶」詩「何須誇落墨、獨賞

て官は礼部尚書に至る。著作に、『困思抄』、『玄晏齋集』等などがある。

江南工。」

館師 天啓二年（一六二二）、王鐸は科挙に合格し、庶吉士となり翰林院に

想見 想像する。『史記』孔子世家論「余讀孔氏書、想見其為人。」

所属した。翌年、東閣大学士となった朱延禧が館師として庶吉士の教育に

番斯 番は、聞の異体字。孫慎行のこと。

当たつたのであろう。『明史』卷二八六・王廷陳伝「正徳十二年成進士、選

卓* *は、「鶯」の鳥を斗に置き換えたもの。「卓犖」と解釈する。この

庶吉士、益恃才放恣。故事、両学士為館師、体嚴重。

上なく優れている。『後漢書』班固傳「卓犖平方州、羨溢乎要荒。」李賢注

聊城蓼水朱公 朱延禧のこと。朱延禧、字は允修。号は蓼水。山東聊城の

「卓犖、殊絶也。」

奏疏 上奏文。『宋史』朱倬傳「每上疏，輒夙興露立，若上帝鑒臨，奏疏凡

數十。」

鯁 鯁は、鯁の異体字。

乾傷坤毀 乾坤は、国家。唐杜甫「洗兵馬」詩「三豪俊為時出，整頓乾

坤濟時了。」傷毀は、損なう。北魏酈道元『水經注』濟水二「四壁隱起，

雕刻為君臣官屬，龜龍麟鳳之文，飛禽走獸之像，作制工麗，不甚傷毀。」

寥寥 数少ない。唐權德輿「舟行見月」詩「月入孤舟夜半晴，寥寥霜雁兩

三聲。」

育幸不幸 明・張鳳翼『談略』「昔蔡邕至會稽，讀趙曄詩細，嘆息過論衡。

論衡今傳詩細不可見，豈書之存亡，有幸不幸耶。」

拂水山房 錢謙益の藏書樓。

9 四

丁亥八月記 每遇煩懣，一披矚輒有清氣，拂人似遊海外奇山，風恬浪定，
天光水像，空蕩無岸。此中消息，如文如詩，口之曉冷，不可單也。即彊形

容、佗人未必喻。故曰、可為知者道。於戲。

丁亥十月二十日王鐸識。淳化、聖教、褚蘭亭、予寢處焉。此冊与昌平本
尤所與偕者。丁亥冬十月、倏失此。偏*牀褥亂筥不得、如割如燔、似雒重
鼎淪没汜汜。偶一婢持來、靚出煤炆暗亂地隙也、喜欲舞謳。天下事嗜一藝
猶若此、況仁賢為左右手乎。

四

丁亥八月に記す。煩懣に遇ふ毎に、一たび披矚すれば輒ち清氣の人を拂
ふ有り、海外の奇山に遊び、風恬(やすら)かに浪定まり、天光水像、空
蕩にして無岸なるに似たり。此の中の消息は、文の如く詩の如く、之れを
口にすれば曉冷なるも、單(つ)くすべからざるなり。即へ彊いて形容す
るも、佗人は未だ必ずしも喻らず。故に曰く、知る者の為に道ふべし、と。
於戲(ああ)。

丁亥十月二十日に王鐸識す。淳化、聖教、褚蘭亭、予は焉(ここ)に寢
處す。此の冊と昌平本とは尤も與に偕(とも)にする所の者なり。丁亥冬
十月、倏(たちま)ち此れを失ふ。偏(あまね)く牀褥亂筥を*(さが)
すも得ず、割くるが如く燔するが如く、雒重鼎の汜汜に淪没するに似たり。
偶一婢持ち來たり。煤炆暗亂地隙に靚(み)出すなり。喜びて舞謳せん
と欲す。天下の事の二藝を嗜むは猶ほ此くの若し、況んや仁賢を左右手と
為すをや。

順治四年（一六四七）八月に記す。病気になるったり疲れ切った時に、一たびこの聖教序を開いて見ると、いつもすぐに爽やかさが風のように吹き付けてくる。あたかも東海の三神山に遊び、風は穏やかで波も落ち着き、陽光が鏡のような水面に光り、何も無い空間がどこまでも続いているようである。この聖教序中に示された王羲之書の生々変化は、文のようであり詩のようであり、口にすれば明白だが、言葉で言い尽くすことはできない。たとえ無理やり表現しようとしても、他人は必ずしも理解しない。故に、見識ある者の為に説明することはできるが（凡庸な人に説明することは難しい）、と言っただ。ああ。

順治四年（一六四七）十二月二十日に王鐸記す。淳化閣帖、宋拓聖教序、褚遂良蘭亭序を、私は自室に置き寝起きをともにしている。この宋拓聖教序と昌平本聖教序とはなかでもとりわけ常に身边に置いているものである。順治四年冬十月、突然この宋拓聖教序が紛失した。寝具や箱を隅々まで探

したが見つけられず、身を裂かれたり焼かれたりしたようであり、周の都である雒邑に置かれた王権の象徴である九鼎が河川の合流地点に水没したかのようだった。偶然にも一人の下女が持って来てくれたが、炕床（オンドル）の暗い隙間に見つけ出したのである。喜んで踊り歌おうとするくらいであった。天下の事で一芸を嗜むというのは、やはりこのようである。まして仁人、賢人を片腕とするなら（淳化閣帖、宋拓聖教序、褚遂良蘭亭序を手元に置くなら）尚更だ。

注（丁亥八月記）

四 京都の藤井齊成公有鄰館所蔵の宋拓聖教序に加えられた小箋に書かれた跋文である。『書道藝術 第九巻』（中央公論社、一九七六）に収録の図版に九九「宋拓聖教序跋」掲げた。丁亥八月の跋文の左に、丁亥十月二十日の跋文が書かれている。

披瀝 広げて見る。

清氣 清明の気。『楚辭』九歌大司命「高飛兮安翔 乘清氣兮御陰陽。」王

逸注「言司命常乘天清明之氣御持萬民死生之命也。」

均為異代忠沈。此可為知者道、難為俗人言也。」

海外 四海の外。『詩』商頌長髮「相土列烈、海外有截。」鄭玄箋「四海

之外率服。」

注（丁亥十月二十日王鐸識）

天光 日光。『左傳』莊公二十二年「有山之材、而照之以天光、於是乎居士

寢處 寢室で休む。『左傳』襄公二十一年「臣為隸新、然二子者、譬如禽獸

上、故曰、觀國之光、利用資於王。」

臣食其肉而寢處其皮矣。」

空蕩 何も無い空。空蕩蕩。元李行道『灰闌記』第三折「濕浸浸棒瘡疼痛

楮蘭亭 東京国立博物館に「楮模蘭亭序」（楮逐良が王羲之「蘭亭序」を臨

哽咽咽千啼萬哭、空蕩蕩那討一餐。」

模したもの刻石拓本）が所蔵されており、巻後に王鐸が絹本の楮模蘭亭

消息 情報。漢蔡琰・悲憤詩「迎問其消息、輒復非鄉里。」

序を臨書した作が合装されている。

曉洽 明白。はっきり知る。『淮南子』修務訓「南見老聃、受教一言、精神

昌平本 昌平本について、中田勇次郎氏は、昌平本というのが、王澍『竹

曉洽、鈍聞條達。」高誘注「曉、明。洽猶了也。」

雲題跋』に記載する、明内府故物で、文待詔（徽明）、唐解元（寅）等の詩跋

於戲 於乎。ああ。感嘆詞。『禮記』大學「詩云、於戲、前王不忘。君子賢

があり、明季、王覺斯の所収した本ではないかということ、この王鐸の

其賢而親其親、小人樂其樂而利其利。」

題跋後に題した杏邨の跋に記されている、という。参考…『書道藝術 第九

可為知者道 民間のことわざ「可為知者道、難為俗人言」。明・王家珍「寄

卷』（中央公論社、一九七六）

王望如」に「但作讀史觀、猶冤却盛心耳。往以南唐屬唐、今以刘宋統漢、

* 搜の異体字「駮」の馬篇を手篇に置き換えたもの。

牀褥 寢具。南朝・宋・劉義慶『世說新語』方正「桓大司馬詣劉尹、臥不起。桓鸞彈劉枕、丸迸碎牀褥間。」

甌箆 甌は、箱。『玉篇』「匣也。」箆は、飯や衣服を入れる箱。『說文』「飯及衣之器也。」

雒重鼎 夏王朝の禹によつて鑄造された九つの鼎「九鼎」を指す。王権の象徴として夏殷周の各王朝によつて伝承された。殷の滅亡後、周公旦によつて周の都である雒邑に置かれた。周が衰えると、諸侯は王権の象徴である九鼎を得んことを思い、楚の莊王が「鼎の軽重を問う」たことは有名である。秦が周を滅ぼした後、九鼎は秦の都咸陽に運ばれ、その後、行方知れずとなった。『漢書』によれば、泗水に水没したということ。

汭汭 汭は二つの河川の合流地点。汭は一度分かれた河川が再び合流すること。

淪没 沈没。『史記』封禪書「周德衰、宋之社亡、鼎乃淪没、伏而不見。」

煤炕 オンドル。

暗胤 真つ暗。

舞謳 踊り歌う。

一藝 技芸。『後漢書』鄧禹傳「有子十三人、各使守一藝。」

仁賢 仁と賢。『韓非子』難言「此十數人者、皆世之仁賢忠良、有道術之士也。」

左右 お付きの副官。『左傳』宣公二十年「左右曰、不可許也、得國無赦。」

10 跋淳化帖

茲淳化八本、先得之葵丘袁氏六焉、後得粵東李氏二焉。皆宋榻棗木、似王

著初本也。鈎灑完譚、可見古人波磔溫澤、縱橫結蕪、涵渾之微。物之尤非可易致矣。袁州、上海、泉州、皆庶下觀耳。較之潘師道絳帖、希白潭帖、蔡京大觀、留禱太清樓續閣帖、紹興監帖、劉次莊戲褒帖、曹士冕星鳳樓、曹之格寶晉、俱為降等。且物患不尤耳。奚必十焉。尤則照乘珠、徑丈珊瑚、火齊結綠、可巨卻車載考哉。是故人材亦狀、管、樂、魯仲連、諸葛亮、若拍之即至、頤指曲矚、盈庭皆足也。又何巨為人之特耶。

淳化帖に跋す

茲の淳化八本は、先に之れを葵丘袁氏に六を得、後に粵東李氏に二を得たり。皆な宋榻棗木にして、王著初本に似るなり。鈎灑は完譚にして、古人の波磔の溫澤、縱横の結蕪、涵渾の微を見るべし。物の尤なるは、致し易かるべきに非ず矣。袁州、上海、泉州、皆な庶下に觀るのみ。之れを潘師道の絳帖、希白の潭帖、蔡京の大觀、留禱の太清樓續閣帖、紹興監帖、劉次莊の戲褒帖、曹士冕の星鳳樓、曹之格の寶晉に較ぶれば、俱に降等と為す。且（たと）へ物は尤ならざるを思ふも、奚ぞ必ずしも十ならんや。尤は則ち照乘の珠、徑丈の珊瑚、火齊結綠なるも、曰て車を卻（あ）けて載すべけんや。是の故に人材も亦た狀り、管、樂、魯仲連、諸葛亮は、若し之を拍けば即ち至り、頤指（いし）され曲矚するならば、盈庭皆な是れなり。又た何を巨て為人（ひととなり）之れ特なりとせんや。

この『淳化閣帖』八本は、先ず葵丘の袁氏から六本を得て、後に粵東の李氏から二本を得た。全て宋榻棗木で、王著初本に似る。筆画の形は完璧で、古人の筆画の穩やかさや潤い、字の縦と横の結構、含蓄の深遠さを見るべきだ。優れた物は、簡単に手に入らない。『淳化閣帖』の袁州、上海、泉州各本は、全て他人の家で見た。これら『淳化閣帖』八本を、潘師道『絳

帖』、希白『潭帖』、蔡京『大觀帖』、留禱『太清樓續帖』、『紹興監帖』、劉次莊『戲魚帖』、曹士冕『星鳳樓帖』、曹之格『寶晉齋帖』と比較すれば、全て列挙した帖より劣る。たとえ優れた物でないことを思い悩んでも、必ずしも完全なものである必要はない。優れた物は、照乘珠や、直径一丈もの珊瑚、火齊珠・結緑といった物珍しい宝珠であるが、車に隙間を空けて山ほど載せるほど存在するわけではなく、極めて少ない。これ故に、人材も同様である。管仲、樂毅、魯仲連、諸葛亮らが、もし招集されたら即座に参上し、命令に従い脚を曲げて恭順を示す人物であるならば、宮廷中皆そうであり、珍しくもない。いったいどうして彼らの人格を特別視しようか。

注

跋淳化帖 『擬山園選集』(文集) 卷三十八・題跋一に収録。

得 得の異体字。

先得之葵丘袁氏六焉 葵丘袁氏は睢州袁氏のこと。王鐸は袁樞と交流があった。

粵東李氏 不明。

宋楊策木 淳化閣帖には、木刻か石刻かの問題があり、歐陽脩、黃庭堅などは木刻説、曾宏父などは石刻説を述べている。

王著 生卒年不詳。字は知微。成都の人。唐・王方慶の子孫たといわれる。太平紹興三年(九七八)頃に召し出され、史館に勤務し字書の校訂等に從事。六年(九八一)、翰林侍書に至る。『淳化閣帖』十卷は、淳化三年(九一二)に太宗の命で王著が内府所蔵の書の名品を選んで木刻し法帖としたもの。

鈎灑 鈎は漢字の筆画の形。灑は法の異体字。

完論 論は善の異体字。全く立派で優れた。『史記匈奴列傳』「其得漢繪案以馳草棘中、衣袴毳裂敝、以示不如旃裘之完善也。」

溫澤 温は穏やかなこと、澤は、潤い。

縱橫 縦と横。唐・韓愈『送李翱』に「譬如浮江木、縱橫豈自知。」とある。結鞶 鞶は構の異体字。字の構造。晉・衛夫人『筆陣圖』に「結構圓備如篆法、飄颻灑落如草草。」とある。

微 奥深い。深遠。

袁州、上海、泉州 それぞれ翻刻された『淳化閣帖』の諸本の名称。袁州本は不明。上海は、顧氏本(玉泓館本)のことか。顧氏本は、宇野雪村『法帖事典』によれば、宋の賈似道が旧蔵していた淳化閣帖の祖刻本は、後に袁褰(尚之)の所蔵となり、次いで潘寅叔(友諒)が購入し、そして上海の顧從義が潘氏から借りて翻刻し、嘉靖四十五年(一五六六)に完成した。顧氏本は名刻として宣伝されたが、顧氏本の偽刻本も存在した、という。

泉州は、泉州本のことか。泉州本は、『法帖事典』によれば、泉州の知府であった常性が洪武四年(一三七二)に淳化閣帖を翻刻した。劉次の莊積文も刻した。原石は後に宣德年間(一四二六―一四三五)に内府に入った。その後については明らかでない。精刻、精拓とは言えない、という。

應下 正房(母屋)の前方の両側の棟。

潘師道絳帖 宇野雪村『法帖事典』によれば、絳帖は宋の尚書郎(部の長官)潘師旦が淳化閣帖の翻刻と別に諸帖を増刻した二十卷。北紙北墨を用い、極めて精采があり、秀れた帖として喧伝された、という。

希白潭帖 今關天彭『法帖叢話』(民友社、一九三三)によれば、慶曆年間、劉沆が潭州で、慧照大師(希白)に、閣帖を那齋に模刻させたもの。宋代は、長沙は潭州に属していたため、潭帖とも長沙帖とも呼ぶ。閣帖と些しく異なり、羲之の霜寒帖、十七日帖や、王濛、顔真卿の諸帖を増入し、各

巻の末に年月が記入してある、という。

蔡京大觀 留禱太清樓閣帖 蔡京大觀は『大觀帖』のこと。留禱は不明。

太清樓閣帖は『太清樓帖』（建中靖國秘閣續帖）のこと。曹士冕『法帖譜系』によれば、「大觀中、奉旨刻石太清樓、字行稍高、而先後之次、亦與淳化帖小異、其間有數帖多寡不同、或疑用真蹟摹刻、凡標題皆蔡京所書、卷尾題云、大觀三年正月一日、奉聖旨模勒上石而又以建中靖國秘閣續帖十卷、易其標題、去其歲月與官屬名銜、以為後帖、又刻孫過庭草書譜及貞觀十七帖、總為二十二卷。」とある。『大觀帖』は、宇野雪村『法帖事典』によれば、徽宗皇帝は淳化の石が皸裂し、編次標題に問題があるので大觀の初め、叙次を改め、一行の字数も改めて刻させたもの。淳化からの翻刻だが、新たに墨蹟から刻したものもあり、鵝宰帖、裏鮓帖が加わっている、という。『太清樓續帖』は、『法帖事典』によれば、普通には、大觀帖を十巻とし、太清樓帖十巻として区別して呼ばれる。従って太清樓帖は又『建中靖國秘閣續帖』とも呼ばれる。太清樓書譜、十七帖が別巻となる、という。

紹興監帖 宇野雪村『法帖事典』によれば、南宋の高宗が紹興年間（一一三一―一一二六）に御府所蔵の閣帖によって板に刻し、國子監に置かせた、という。

劉次莊戲魚帖 宇野雪村『法帖事典』によれば、元祐年間（一〇八七―一〇九三）劉次莊が家蔵の淳化閣帖十巻を摸刻し、巻尾の篆題を除去して釈文を増刻したもの。巷間に見られるものは明代あたりの翻刻と思われるが、淳化とは叙次が異なる、という。

曹士冕星鳳樓 宇野雪村『法帖事典』によれば、『星鳳樓帖』の刻者は曹彦約、または彦約の子の曹士冕であり、明代既に伝来が希少で、董其昌も見えていなかった、という。

曹之格寶書 『寶晉齋帖』のこと。全十巻。内容は、巻一―六は王羲之、

巻七・八は王献之、巻九・十は二王以外の晋人の書。『寶晉齋帖』は、南宋の寶祐年間（一二五三―一二五八）に、無為郡（安徽）の通判をして曹之格が刻した集帖。寶晉齋は米芾が謝安の八月五日帖、王羲之の王略帖、王献之の十二月帖などを得て、晝齋に付けた名のこと。参考：中田勇次郎『王羲之を中心とする法帖研究』（二玄社、一九六〇）

照乘珠 光り輝き、車を明るく照らすことができる宝珠。唐・高適「漣上別王秀才」に「何意照乘珠、忽然欲暗投。」とある。

珊瑚 珊瑚。裝飾品として珍重。

火齊 火齊は火齊珠という宝珠の一種のこと。『文選』張衡・西京賦「翡翠火齊、絡以美玉。」とあり、李善の注に「火齊、玫瑰珠也。」とある。

結綵 美玉の名。『戰國策』秦策三「臣聞周有砥厄、宋有結綵、梁有懸黎、楚有和璞、此四寶者、工之所失也、而為天下名器。」

可以卸車載孝哉 『戰國策』齊策三「及之墨泰、梁父之陰、則却車而載耳。」
管樂 管仲・樂毅のこと。晋・袁宏「三國名臣序讚」に「孔明盤桓、俟時而動、遐想管樂、遠明風流。」とある。管仲は、春秋時代・齊の政治家。

生卒年不詳。名は夷吾。仲は字。齊の公子糾に仕えるが、公位争いで糾が桓公に敗れ身柄を拘束される。後に鮑叔の推挙により桓公に仕える。『管子』の著者としても伝わる。樂毅は、戰国時代の武將。生卒年不詳。燕の昭王に仕え、齊を攻めて功績を挙げ、昌国に封じられる。後に、恵王に疑問視され趙に逃れる。

魯卨連 戰国時代・齊の雄弁家。生卒年不詳。魯連とも称す。節義を堅守し、榮譽を好まなかった。

諸葛亮 諸葛亮（二八一―二三三）は、三国時代・蜀漢の宰相。名は亮。字は孔明。諡は忠武。琅邪陽都の人。蜀漢・劉備の三顧の礼に応じ、戦略家

として仕える。天下三分の計を以て、孫權と手を組み、赤壁にて曹操を破る。

招 招の異体字。

頤指 頤で人を使うこと。『漢書』賈誼傳「今陛下力製天下、頤指如意、高拱以成六國之醜、難以言智。」

曲臚 臚は、『集韻』に「臚臚、曲脚也。」「正字通」に「膝後曲節中也。」とある。『荀子』富國篇に「譬之是猶使處女嬰寶珠、佩寶玉、負戴黃金、而遇中山之盜也、雖為之逢蒙視、詘要撓臚、君廬屋妾、由將不足以免也。」とある。

盈庭 朝廷に満ちる。『詩経』小雅小旻「發言盈庭、誰敢執其咎。」

11 跋絳帖

宋太宗淳化帖稱詞苑之寶、絳帖其嫡子、太清樓其介弟、前人持論甚篤、羲之頭眩帖、張華前一帖數種、淳化所無、十二冊内不無可刪、餘精爽飛動、靖康時為火燬。此後、大觀豈肯縱慢生穉不及、不必據東觀餘論也。他如東書堂、星鳳樓、寶賢堂、猿猴肉立、郎當舞袖、視此覺石頑水渤矣。今礎博雅嗜古。此帖琅琅、畱觀余几案約一季所、姜堯章評文辨而評未盡、豈臞蛇饗客之謂乎。余懶于巧仕、于詩之外、沉心于此。望島如舟、望舟如鳥、愛而忘、忘而飲食寢寐焉。夫世之可愛者多而獨好此、其故謂何也。

絳帖に跋す

宋太宗淳化帖は詞苑の寶と稱せらる。絳帖は其の嫡子、太清樓は其の介弟にして、前人の持論甚だ篤し。羲之の頭眩帖、張華の前一帖數種は、淳化の無き所なり。十二冊の内、刪るべきもの無く、んばあらざるも、餘は精爽飛動せり。靖康の時に火の燬（や）くところと為る。此の後、大觀は皆

な縱慢生穉にして及ばず。必ずしも東觀餘論に據らざるなり。他の東書堂、星鳳樓、寶賢堂の如きは、猿猴肉立、郎當舞袖にして、此れを視れば石頑の水渤なるかと覺ゆ。今礎は博雅にして古を嗜む。此の帖は琅琅にして、余が几案に畱め觀ること約一季所（ばかり）、姜堯章は評文辨（あまね）きも評は未だ盡きず、豈に蛇を臚にして客に饗せるの謂ひにやらんや。余は巧仕に懶（おこた）り、詩に于けるの外、心を此に沉む。島を望むに舟の如くし、舟を望むに鳥の如くす、愛して忘れ、忘れて飲食寢寐す。夫れ世の愛すべき者多きも獨り此を好む、其の故は謂何（いかん）。

北宋太宗の『淳化閣帖』は、姜堯の宝と稱される。『絳帖』は『淳化閣帖』の嫡子であり、『太清樓帖』は『淳化閣帖』の弟だ、という陳繹曾の見解は非常に奥行きが深い。王羲之の「治頭眩帖」、張華の前の一帖など數種の帖は、『淳化閣帖』にない。『絳帖』十二冊中には削つても良いような詰まらない作品もあるが、残りは精神が爽やかで活き活きしている。『絳帖』は、靖康の変の戦火を被った。その後においては、『大觀帖』は恣意的で驕慢、生硬で幼稚なので『絳帖』に及ばず、『東觀余論』の考証に依るまでもない。他の『東書堂帖』、『星鳳樓帖』、『寶賢堂帖』の如きは、獸が立ったような肉太の字で、踊り手が不格好に袖を振り回したような字であり、それを見ると、磨かれていない自然石に水がしみ込んで出来た石の割れ目かと思う。宋之譜どのは博識で古を嗜む。『絳帖』は金石の爽やかな音が鳴り響くような名品で、（宋之譜とのから借りて）約一年ばかり我が机上に置いて見た。姜白石は『絳帖平』で『絳帖』全体について論じているが、全二十巻のうち後半十六巻は散佚し、その評価は完全ではない。したがって、蛇の肉をスープにして鯉の肉と偽って客をもてなした訳ではない。私は宮仕えを完璧にこなすことには無精で、詩作に傾倒する他、心を書法に集中している。

舟だと思つて見たものが実は鳥であり、鴨だと思つて見たものが実は舟であつた（遠くから見ると見間違ふのは、目や心の惑いである。人は心の迷いによつてその見え方も異なる。）というが、何かを愛してもその愛すること自体を忘れ、飲食し寝て夢を見る普通の生活を送る境地に私は到達している。そもそも、世間には愛でるべきものが数多く存在するが、私はただこの『絳帖』を好む。その理由は、何であろうか。

注

跋絳帖 『擬山園選集』（文集）卷三十八・題跋一に収録。絳帖について、今關天彭『法帖叢話』（民友社、一九三三）は、「十二卷本の絳帖は偽作であるが、刻も精しく、紙も墨其に好く、且つ世に出た事が頗る早く、恐らく明初人か或は元人であろう。」と述べ、「また十卷本の偽刻もあり、偽絳帖の一部を翻刻して、いろいろ古帖を作るものもある。標題に絳帖第何巻とあるのは、一見してその偽刻なる事が知られる」と説明している。増田氏は、『偽絳帖』の成立時期は、孫承沢が『庚子銷夏記』を執筆した順治十七年（一六六〇）から姜宸英の在世中（康熙三十八年、一六九九）までと想定しており、注で王鐸が本跋文で論ずる十二卷本『絳帖』は、『絳帖別本』等の翻刻本についてであり、『偽絳帖』でないことは確実であると述べている。参考：増田知之『偽絳帖』の再検討（一）（『書論』卷三十八、二〇一二年）。

絳帖其嫡子 元陳繹曾『翰林要訣』に「絳帖。淳化之子、用淳化閣帖增入別帖、重編廿卷、潘師日摹刻。骨法清勁、足正王著肉勝之失。然駿馬露骨、又未免羸瘠之憾。」とある。嫡子は、正妻の子ども。『左傳』僖公二十四年「以盾為才、固諍於公、以為嫡子、而使其三子下之。」

太清樓其介弟 元陳繹曾『翰林要訣』に「大觀帖。淳化之弟。大觀間奉旨

以御府真跡重刻於太清樓。中有蘭亭帖、蔡京摹刻、京沈酣墨、筆偏手縱、非復古意、賴刻手精工、猶勝他帖爾。」とある。介弟は、弟の敬称。『左傳』襄公二十六年「天子為王子圍、寡君之貴介弟也。」

前人持論 元陳繹曾『翰林要訣』のこと。持論は、見解。宋・周輝『清波雜誌』卷十「韓魏公妻弟崔公孺、持論甚正、公喜與之語。」

頭眩帖 王羲之の「治頭眩帖（頭眩方帖）」のこと。王鐸の指摘通り、この帖は『淳化閣帖』に掲載されていない。宇野雪村『法帖事典』掲載の『偽絳帖』の目録によれば、絳帖卷第三に収録される。

張筆前一帖數種 數は數の異体字。参考として、宇野雪村『法帖事典』掲載の『偽絳帖』の目録によれば、絳帖卷第八に「晋丞相張華書」が見え、その前に「晋侍中郁恢書」があるという。『淳化閣帖』中に「晋侍中郁恢書」はない。今關天彭『法帖叢話』記載の『絳帖』の目録によれば、歴代名臣法帖第二に「晋丞相張華書」があり、その前に「吳青州刺史皇象」があるという。『淳化閣帖』には「吳青州刺史皇象」が収録される。

精爽 精神が爽やか。『左傳』昭公七年「用物精多、則魂魄強、是以有精爽至於神明。」

飛動 躍動すること。南朝・梁・劉勰『文心雕龍』詮賦「延壽靈光、含飛動之勢。」

靖康 北宋・欽宗期の元号（一一二六・一一二七）。

火燄 火で焼き尽くすこと。ここでは、靖康の変を指すか。今關天彭『法帖叢話』によれば、靖康の変以後、中国が南北に分断してからは、絳帖が得難くなり、その価値も重くみられていたという。

大觀 『大觀帖』のこと。宇野雪村『法帖事典』によれば、『大觀帖』は刻石二十年足らずで靖康の変に遭い、石が壊れ拓本の伝世するものが少ない、という。またその後について、今關天彭『法帖叢話』によれば、元に至つ

て顧德輝（玉山）が始めて重刻し、次に明の萬曆頃、陳懿卜と云ふ人が翻刻した、という。『大觀帖』の欠点について、藤原楚水『書道金石学』（三省堂、一九五三）によれば、強いて欠点を挙げれば、遒媚流麗に過ぎ、含蓄に富んだ素樸さが失われているとでもいえるだろう、という。

縱慢生穉 縱慢は、勝手気ままで、いい加減なこと。生穉は、未熟で稚拙なこと。穉は稚の異体字。王世貞『弇州山人四部稿』巻百三十四・王右軍草書蘭亭記「餘初見此帖、大駭亡論、與右軍存跡毫髮不相似、其縱慢生穉、即唐開元以前無之。」

東觀餘論 北宋・黃伯思の著。黃伯思、字は長賚、號は雲林子。福建邵武の人。元符三年の進士。著は『東觀餘論』。東觀とは、宮中の藏書所をいう。『東觀餘論』中に含まれる『法帖刊誤』二巻は、『淳化閣帖』中の諸帖の真偽を論考したもので、米芾が『淳化閣帖』の偽帖を挙げただけで粗略も多かったことに対し、黃伯思は綿密な考証・真偽の理由を記す。

東書堂 東書堂帖のこと。宇野雪村『法帖事典』によれば、「明の太祖の孫に当たる周憲王有燉が世子であった永樂十四年（一四六二）に自ら古帖を臨摸したものである。淳化閣帖を中心にして絳帖、潭帖を校合して取捨して編集したものである」といい、「淳化閣帖が主軸になっているが、淳化閣帖を全部収めているわけではない」という。

星鳳樓 『星鳳樓帖』のこと。

寶賢堂 『寶賢堂集古法帖』のこと。宇野雪村『法帖事典』によれば、「弘治二年（一四八九）に晋靖王奇源（當時は世子）が、参政の王進、副使の楊光溥、僉事の胡漢、楊文卿、等に命じて、淳化閣帖、絳帖、大觀帖、太清樓帖、寶晉齋帖及び元、明の諸名家の筆蹟などからそのすぐれたものを採ばせ、宋灝、劉瑀に摸勒上石させて十二巻とした」ものであるという。また、「原石初拓本の伝わるものは少ない。明末の動乱を経て石は散佚破

損したので、康熙十九年（一六八〇）に五十三石を補刻した」という。猿 獸のこと。『集韻』に「延知切、音彛。獸也。」とある。

顔 貌の異体字。

郎當 服裝がきちんとしていないこと。宋・陳師道『後山詩話』「楊大年傀儻詩云、鮑老當筵笑郭郎、笑他舞袖太郎當。若教鮑老當筵舞、轉更郎當舞袖長。」

石頑水泐 石頑は硬い石、水泐は水によって石が筋目通り割れること。

今礎 『王鐸年譜長編』一冊によれば、宋之譜、字は今礎、号は岱雲。山東沂州の人。崇禎元年の進士。『民国』臨沂縣志』巻九・人物一に伝記があるという。

博雅 学識が深く広いこと。『後漢書』杜林傳「博雅多通、稱為任職相。」

嗜古 古を好むこと。宋・楊万里『送曾秀才歸永豐』に「覓舉不應專嗜古、能文安得卻嫌貧。」とある。

留 留の異体字。

几案 机。『南齊書』劉善明傳「牀榻幾案、不加剗削。」

季 年の異体字。

姜堯章評文辨 堯は堯の異体字。姜堯章は姜夔。姜夔（一一五五—一二二一頃）、字は堯章。号は白石道人。号から姜白石と称される。饒州鄱陽縣（江西省）の人。南宋詞の大家。著作に、『白石道人詩集』、『統書譜』、『絳帖平』がある。ここで王鐸は、姜白石『絳帖平』の内容について指摘しているであろう。『四庫提要』の『絳帖平』六卷（兩江總督採進本）の項に引く『墨莊漫錄』によれば、「其書本二十卷、舊止抄本相傳、未及雕刻。所載字號、止於「山」字。其「河」字以下亡佚十四卷、竟不可復得。然殘珪斷璧、終可寶也。」であるという。

豈臙蛇象之謂乎 北齊・劉畫『劉子』巻十・正賞に「越人臙蛇、以饗秦

客、甘之以為鯉也。既而知其是蛇、攫喉而嘔之、未為未知味也。」とある。腫は、肉を煮込むこと。舌は、乎の異体字。

懶 怠けること。おこたる。

沉心 沉は沈の異体字。

望島如舟、望舟如鳧 北齊・劉畫『劉子』卷十・正賞に「昔二人評玉、一人曰好、一人曰醜、久不能辨。……海濱居者望島如舟、望舟如鳧、而須舟者不造島、射鳧者不向舟、知是望遠、目亂而心惑也。」とある。鳧は、鳧の異体字。

飲食 飲んで食へること。『書経』酒誥「爾乃飲食醉飽。」

寢寐 眠ること。漢・司馬相如「長門賦」に「忽寢寐而夢想兮、魂若君之在傍。」とある。

可愛 人に好感をもたせる。愛すべき。『書経』大禹謨「可愛非君。可畏非民。」

12 跋二王帖

二王卓絶不待評矣。人鮮知其在筆墨外者。筆墨外則無點畫邊傍、從何地用思考。故人用思於無可用思、三百詩之言盡、意不盡也。樂可無鐘鼓、琴

可無弦之謂耳。淺學動議某帖某畫不佳、不悟雙鉤刻經、數手摹本已幾千季

矣、去原墨跡止十之三。望畫中龍即真龍也、真龍乎哉。如從其言、夫子自

謂無大過者、實有小過歟。

二王帖に跋す

二王は卓絶にして評を待たず矣。人は其の筆墨の外に在る者を知ること鮮（すくな）し。筆墨の外なれば則ち點畫の邊傍に無く、何の地に從りてか用思せんや。故に人は用思すべきも無きに用思す。三百詩の言盡くるも、意盡きざるなり。樂に鐘鼓無かるべけんや、琴に弦無かるべけんやの謂（いひ）なるのみ。淺學動（ややも）すれば某帖某畫佳からずと議し、雙鉤刻經、數手摹本の已に幾んど千年なるを悟らず矣。原墨跡去ることは止だに十の三のみならんや。畫中の龍を望むに即（たと）へ真龍なれども、真龍ならんや。もし其の言に従へば、夫子自ら大過無しと謂ふ者は、實に小過あらんか。

二王は超越した存在で、評価するまでもない。書作品の外に存在するものを理解する人は少ない。書作品の外であれば、筆画のそばにはないので、

何に基づいて考えを巡らすのか。したがって、古人は考えることが不可能

などところで考えることになる。『詩経』には言葉で言い尽くせない言外の意

がある。音楽には鐘と鼓が必須であり、琴には弦が必須であるという意味

である。学識が浅い人は往々にして某帖の某筆画が良くないと議論し、双

鉤填墨や模刻など何人もの手による模本作製が既に約千年近く続いている

ことを理解していない。原本から離れること十分の三だけではあるまい。

画中の龍を見るに、本物の龍のようであったとしても、本物の龍であろう

か。もしその言葉に従うなら、孔子が自ら大きな過ちが無いと言うのは、

実際には小さな過ちがあるとするのか。

注

跋二王帖 『擬山園選集』(文集)卷二十八・題跋一に収録。二王は王羲之・

王献之のこと。

卓絶 他と比べるものがない程に秀でていること。漢班固「典引」に「而

炳諸典謨 以冠德卓絶者 莫崇乎陶唐。」とある。

筆墨 書作品のこと。漢 王充「論衡」亂龍「子駿漢朝智囊 筆墨淵海。」

邊傍 傍は傍の異体字。

用思 考えを巡らすこと。唐 劉知幾「史通」雜說中「劭篤好經史 用思既

專、性頗恍惚。每至對食、閉目凝思。」

𠄎 乎の異体字。

三百詩 三百詩は『詩経』のこと。『論語』為政「子曰、詩三百、一言以蔽

之、曰、思無邪。」

言盡、意不盡也 詩文は深い意味を有しており、言葉では意を言い尽くせ

ていないこと。宋 嚴羽『滄浪詩話』詩辨「盛唐諸人惟在興趣、羚羊掛角、

無跡可求。故其妙處、透徹玲瓏、不可湊泊、如空中之音、相中之色、水中

之月、鏡中之象、言有盡而意無窮。」

鐘鼓 鐘と鼓。『詩経』周南關雎「窈窕淑女、鍾鼓樂之。」

琴可無弦 無弦は、弦が張られていない琴。南宋・趙崇嶠「讀陶詩」其二

「有籬可種菊、有琴可無弦。適趣不待聲、種菊真偶然。南山有佳氣、得意終忘言。薄酣空庭中、一笑涼風前。」

13 跋米友仁帖

淺學 学識が浅いこと。漢 孔安國「古文孝經訓傳序」に「故古文孝經初出於孔氏、而今文十八章、諸儒各任意巧說、分為數家之誼、淺學者以當六經。」とある。

米敷文灑海嶽書、得其豪邁之勢、披觀紙故、猶足動人。海嶽手蹟墨滯者不可觀矣、觀者當目之為虎賁可也。

雙鉤刻經 双鉤填墨と解釈した。

米友仁帖に跋す

數手摹本 模刻と解釈した。

眞龍 龍。他にない真のもの。漢 王充『論衡』亂龍「夫易言靈從龍者、謂眞龍也、豈謂土哉。」

米敷文は海嶽の書に灑とり、其の豪邁の勢を得。披觀するに、紙の故（ふる）きも猶ほ人を動かすに足る。海嶽手蹟の墨滯なる者は觀（み）るべからず、觀る者は當に之を以て虎賁と為すべきも可なり。

夫子 孔子のこと。『論語』學而「子禽問於子貢曰、夫子至於是邦也、必聞其政、求之與、抑與之與。」

米友仁は米芾の書を手本とし、米芾の豪放な勢いを得ている。米友仁の

大過 大きな過失。『論語』述而「子曰、加我數年、五十以學易、可以無大過矣。」

作品を広げて鑑賞するに、紙質は古びているがいまなお人の心を揺さぶるに足る作品である。米芾の書作品で墨に潤いのあるものにはなかなか出会

小過 小さな過失。『論語』子路「子曰、先有司、赦小過、舉賢才。」

えない。鑑賞者は、この作品を勇者と呼ぶべきだとしても良いだろう。

注

野。」とある。孔傳で「勇士稱也。若虎賁獸，言其猛也。皆百夫長。」と
いう。

跋米友仁帖 『擬山園選集』(文集) 卷三十八・題跋一に収録。米友仁(一

〇八六一一六五)は、字は元暉。米芾の子。官は兵部侍郎、敷文閣直學

14 臨張芝冠軍帖後

士となる。書画をよくした。

二王灑芝、或謂為贗、強作解事、可哂。

米敷文 米友仁のこと。

海嶽 米芾のこと。

張芝冠軍帖を臨せる後に

豪邁 洒脱で豪放なさま。『世說新語』言語「桓公北征」劉孝標の注が引く

二王は芝に灑(のつと)る。或ひと謂ひて贗と為し、強いて解事を作す

『桓溫別傳』に「溫少有豪邁風氣、為溫嶠所知。」とある。

は、哂(わら)ふべし。

手蹟 書作品。『後漢書』循吏傳序「其以手跡賜方國者、皆一札十行、細書

成文。」

王羲之・王獻之は張芝を模範としている。ある人がこの作品を偽りであ

墨濡 濡墨。墨を豊富につけること。清阮元『小滄浪筆談』卷三「有妓女

ると言い、無理にわかったふりをしているのは、笑うべきことである。

謝天香者、以裙裾濡墨、大書標芳二字。」

虎賁 勇士。『書經』牧誓序に「武王戎車三百兩、虎賁三百人、與受戰於牧

注

臨張芝冠軍帖後 王鐸『瓊蕊廬帖』記載の跋文。張芝の冠軍帖は『淳化閣

帖』第二に掲載されている。

二王 王羲之・王献之のこと。

芝 張芝のこと。

解事 物事の道理を理解すること。『南齊書』倖臣傳茹法亮「法亮使辟解

事、善於奉承。」

15 跋米芾吳江舟中詩卷

米黻書本義獻、縱橫飄忽、飛仙哉。深得蘭亭灑、不規規摹擬、予為焚香

寢臥其下。公望郭四兄善藏。勿輕示不好書者。皇帝崇禎十六年八月初四日。

題於林秀亭中。同垣公都諫 山圖、公度、洙源、漱六觀。王鐸題書。

米芾吳江舟中詩卷に跋す

米黻の書は義獻を本とし、縱橫飄忽、飛仙なるかな。深く蘭亭の灑を得、

規規として摹擬せず、予は為に焚香し其下に寢臥す。公望郭四兄は藏を善

くして、書を好まざる者を輕示するなかれ。皇帝崇禎十六年八月初四日。

林秀亭中に題す。垣公都諫、山圖、公度、洙源、漱六と同(とも)に觀る。

王鐸題書す。

米芾の書は王羲之・王献之を基本とし、縱橫無尽で輕快、空飛ぶ仙人の

ようである。米芾は蘭亭叙の書法を深く心得ており、模倣に拘っていない。

私はこの米芾の作品の為に香を焚き、その下で就寢する。郭士標は優れた

收藏家であり、書を好まない者として輕視してはいけない。崇禎十六年八

月四日。林秀亭中にて題す。張縉彦、汪度、鄭世憲、張縫彦、郭世元らと

共に鑑賞した。

注

跋米芾吳江舟中詩卷 米芾「吳江舟中詩卷」は、メトロポリタン美術館所

蔵。訳註に当たり、『欽定石渠寶笈三編』延春閣蔵十二に記載される「宋米芾自書吳江舟中詩一卷」を参照した。なお、『欽定石渠寶笈三編』では「輕示」を「輕視」とする。

縱橫 自由奔放なさま。『後漢書』耿弇傳「諸將擅命於畿内、貴戚縱橫於都内。」

飄忽 軽快なさま。『文選』傅毅・舞賦に「蛟蛇媮媮、雲轉飄忽。」とあり、李善の注に「飄、與勿同。」とある。

飛仙 空に飛ぶ仙人。『海内十洲記』方丈洲「周迴五千裡外别有圓海繞山圓海水正黑、而謂之冥海也、無風而洪波百丈、不可得往來……惟飛仙有能到其處耳。」

蘭亭 王羲之の蘭亭叙のこと。

規規 字識が浅く拘泥するさま。『莊子』秋水「子乃規規然而求之以察、索之以辯、是直用管闢天、用錐指地也、不亦小乎」とあり、成玄英の疏に「規規、經營之貌也。」とある。

摹擬 模倣すること。南朝・梁・鍾嶸『詩品』卷中「文通詩體總雜、善於摹擬。筋力於王微、成就於謝朓。」

焚香 お香を焚くこと。北周・庾信「三月三日華林園馬射賦」に「屬車醜酒、複道焚香。」とある。

寢臥 横になって眠ること。

公望郭四兄 郭十標のこと。『乾隆』新郷縣志』卷三十一・人物下によれば、郭十標、字は公望、号は中水であるという。郭十標の兄弟の一人であ

る郭十棟（字は公隆、号は南湖）について書かれた『孫徵君日譜録存』卷三十六所収の「吏部侯選知縣南湖郭公墓誌銘」によれば、郭十棟の兄弟として十榘、十梓、十楨、十標の名をあげている。四兄とは、四番目の兄弟の意味を指すのであろう。

林秀亭 不明。

垣公都諫 張縉彦のこと。『清史列伝』卷七十九によれば、張縉彦、字は濂源、号は垣公。河南新郷の人。崇禎四年の進士。官は戸部主事、兵部尚書に至る。清朝に入り、工部右侍郎となったという。

山圖 『王鐸年譜長編』第二冊によれば、汪度、字は山圖。歙縣の人であるという。『擬山園選集』（詩集）卷十一に「喜汪子嗜詩」がある。

公度 『王鐸年譜長編』第二冊によれば、鄭世憲のこと。鄭世憲、字は公度。歙縣の人。新郷に流寓した。医学をよくしたという。

洙源 『王鐸年譜長編』第二冊によれば、張縫彦のこと。張縫彦、字は洙源であるという。また、『乾隆』新郷縣志』卷二十七「邱墓誌下」に伝記があるという。

漱六 『王鐸年譜長編』第二冊によれば、漱六は郭世元であるという。『光緒』長治縣志』卷六・列伝によれば、郭世元は山西長治の人。書画をよくした。書法においては、王羲之「集字聖教序」、楷書は「黃庭經」を習ったという。

16 跋信行禪師碑

冬仲、同路若、公兩、奉若過文孫親翁齋小飲、覽信行禪師碑、用筆渾融静逸、煥狀古質、無後代習氣。喜甚。又聞歌粵風沙苦羸車堞馬聲嘈襟中偏觀寶書、大是快事。曰酬數*。盡銷寒冽之氛。己丑歲社弟王鐸題。

信行禪師碑に跋す

冬仲、路若、公兩、奉若と同(とも)に文孫親翁の齋に過りて小飲す。信行禪師碑を覽るに、用筆は渾融靜逸、煥然として古質、後代の習氣無し。憲(よろこ)ぶこと甚し。又た歌粵を聞き、風沙苦(はなは)だ靈(つちふ)り車塚馬聲嘈襍たる中偏く寶書を觀るは、大いに是れ快事なり。曰(よ)りて數*を醗(の)みて、盡く寒冽の氣を銷(け)す。己丑歲社弟王鐸題す。

順治六年仲冬十一月、陳道、□□(公兩)、□□(奉若)と一緒に王鵬沖

の書齋を訪ねて軽く飲んだ。信行禪師碑を鑑賞するに、薛稷の用筆には統一性があり静謐な逸品で、光彩を放つ古風さがあり、後の時代の悪い習慣がない。大変嬉しい限りである。また歌を聞き、砂嵐が吹き荒れ、車塵と馬の鳴き声が飛び交う中で王鵬沖所蔵のあらゆる書の名品を鑑賞できたことは、甚だ愉快であった。そのため、何杯もの酒を飲み干し、寒さも一切感じなくなった。順治六年(一六四九)に王鐸が題す。

注

跋信行禪師碑

大谷大学所蔵の薛稷「信行禪師碑」記載跋文。薛稷(六四九・七二三)は、唐の書家、字は嗣通。蒲州汾陰の人。官は工部礼部二尚書、太子少保に至る。「信行禪師碑」は天下の孤本として名高い名品だが、かつて米国で翁萬戈所蔵「宋拓信行禪師碑」が発見された。伊藤滋「宋拓唐薛稷信行禪師碑」天下第二本考 補遺(一)墨 二六〇号所収、芸術新聞社、二〇一九)では、大谷大学本、羅振玉旧蔵「信行禪師碑」翻刻拓本、翁萬戈本の比較検討を行い、翁萬戈本は天下の第二本ではないとし、羅振玉旧蔵本よりも更に古く、断裂痕のない旧拓翻刻本を使用し、字画の一部を故意に汚し、塗墨し、剪装加工して、「宋拓信行禪師碑原刻本」に偽装したものであるという見解を示している。

冬仲 『王鐸年譜長編』第三冊によれば、この跋文は順治六年(一六四九)

十一月に書かれたものだという。

路若、公兩、奉若 『王鐸年譜長編』第三冊によれば、路若は陳道(字は路若)のこと。残り二者の詳細は記載されず。

文孫親翁 王鵬沖のこと。王鵬沖、字は文孫、明の尚書であった永光の孫。

〔嘉慶〕長垣縣志 卷十一に伝記がある。

渾融 融合。宋・羅大經『鶴林玉露』卷六「其立意措辭、貴渾融有味。」

靜逸 落ち着いたさま。

煥然 光輝いたさま。漢・司馬相如「大人賦」に「煥然霧除、霍然雲消。」とある。

古質 古風で優雅さと質朴さを有すること。唐・段成式「西陽雜俎寺塔記

下」に「佛殿内西座、番袖甚古質。」とある。

習氣 習慣。宋・蘇軾「再和潛師」に「東坡習氣除未盡、時復長篇書小草。」とある。

歌粵 歌唱。宋・梅堯臣「賦孔雀送魏生」に「非爾樂、去何之、北方佳人

或歌粵。」とある。

風沙 風で舞い上がった土。唐・李頎「塞下曲」に「黃雲雁門郡、日暮風

沙裏。」とある。

苦蘊 酷い土埃。

車塚 車の走行で生じる塵。

馬聲 嘶(いなな)くこと。馬が鳴く。

嘈襍 襍は雜に同じ。嘈雜。賑やかで騒がしいこと。晉葛洪『抱樸子』

刺驕「或曲晏密集、管絃嘈雜、後賓填門、不復接引。」

寶書 貴重な書。唐・溫庭筠「春日」に「寶書無寄處、香轂有來期。」とある。

る。

快事 痛快。晉・葛洪『抱樸子』刺驕「此蓋左衽之所為、非諸夏之快事也。」

回 因の異体字。

數* *は、「鶯」の鳥を斗に置き換えたもの。「罌」と解釈する。罌は古

代の礼器。酒を温めるために使用された。

寒冽 寒さ。

社弟 明代後期には、東林党や復社など、政治的や文学的な結社が多数結

成された。社弟とは、おそらくそうした結社の一員であることを言うもの

であろう。

17 為太峰題義之像

幼季慕斯人、其人介如玉。擾擾京華中、瞻之或在屋。衣冠非今製、扶攜為疾足。息心觀其意、虛曠無榮辱。玄漠太初降、以道為棲宿。偶狀弄柔翰、驚龍夸衆目。晉書骨鯁稱、王隱欽直木。桓溫書止之、朝宁遜有欲。兼矚誓墓文、其心更昭穆。渡江終焉志、豈獨墨華淑。不憚與許邁、采藥窮山谷。終乃巨樂終、書法反掩覆。我素師其書、其品信耿肅。為國匡大端、晝不晦幽獨。景行慮彌淡、彼匪墨藩局。斯人古賢達、勁節獲後福。晤對欲語我、目坦示為腹。悠惻斯人懷、再拜摹心曲。望胡美會稽山、終古山光綠。

太峰の為に義之の像に題す

幼季斯の人を慕ふ、其の人介(みさを)玉の如し。擾擾たる京華の中、之を瞻るに或いは屋に在り。衣冠今製に非ず、扶攜するは足を疾(や)むが為なり。息心して其の意を觀るに、虚曠にして榮辱無し。玄漠は太初に降り、道を以て棲宿と為す。偶狀柔翰を弄び、驚龍は衆目に夸る。晉書に骨鯁と稱され、王隱は直木なるを欽(つつし)む。桓溫書して之を止め、朝宁欲有るを遜(のが)る。兼ねて誓墓文を矚るに、其の心更に昭穆たり。江を渡り終焉の志あり、豈に獨だに墨華の淑のみならんや。憚らず許邁と、采藥して山谷を窮めんことを。終に乃ち樂を曰て終ふるも、書法は反て掩覆す。我は素より其の書を師とし、其の品は信に耿肅たり。國の為に大端

を匡(ただ)し、書は幽獨を晦(くらま)さず。景行彌いよ淡なるを慮り、彼は墨藩の局に匪ず。斯の古人の賢達にして、勁節後福を獲んや。晤對して我に語らんと欲し、坦を目て示すに腹と為す。悠細たり斯の人の懐(おもひ)、再拜して心曲を篋(の)ぶ。會稽山を望望するに、終古山光綠なり。

幼少から陰潤どのを慕っていたが、彼の忠義は玉のごとく節操を重んじ

誠実である。動乱の北京の都で、彼と会うのは或いは家の中である(大っぴらには会えない)。彼の衣服と冠は清朝のものではなく(明代のもので、

手を貸してもらっているのは彼が足を病んでいる為だ。心を落ち着けて彼の気持ちを察するに、空虚で栄辱のかけらも無かった。

真理は太古の昔に地上に降り、道教を住まいとした。その真理を受け継

いだ王羲之は偶然にも筆を自在に使い、空に馳せめぐる龍のような筆遣いは、多くの人々の目に誇るべきものである。王羲之は『晋書』で硬骨漢と

して讃えられ、王隱は王羲之をまつすぐで質朴な人として尊敬した。王羲之は書を送って桓温を押し留め、朝廷は桓温の欲望を回避できた。さらに、

王羲之の父母の墓前で誓った文を見ると、彼の心が非常に美しいことが分かる。王羲之が錢塘江を渡って会稽の地を訪れ、この地で生涯を終える気になったのは、蘭亭序という書法の精華がここで生み出されたことだけではない。憚ることなく許邁とともに、採葉して山や谷の奥深くに入った。

最終的に楽しみを極めて没したが、書法はかえってその事実を覆い隠してしまった。私は昔から王羲之の書を規範としていたが、その品格は本当に汚れなく美しい。王羲之は国家の為に主要な部分を正したが、その書は王羲之が隠棲して孤高であったことをよく表現している。思うに、いま世の中に公明正大な道徳がいよいよ少なくなった中、王羲之は単なる書家ではないのである。

陰潤どのは古の賢者のような存在であり、節操が固いため晩年に幸福を得られなかった。向かい合って私に語りかけようとし、王羲之が腹を出して仰向けに寝そべっていたように、何の飾り気もなく接してくださいました。

長い間、陰潤どのかを心に思い、再拜して心の奥底の思いを詩に述べ

る。遙かに公稽山を望み見るに、永遠に山色は緑なしているだろう。

〔注〕

為太峰題義之像 『擬山園選集』卷六・五言古詩に収録。太峰は、陰潤の

こと。陰潤、号は太峰。山西芮城の人。崇禎七年の進士。歴官工科給事中、政府に直言したために流謫となる。後に召還される。李自成に迫られて偽

職を授かるも、箕山に逃れた。陰潤の伝記は、『解州芮城縣志』卷九・人物に見える。また、この詩は『晋書』卷八十・王羲之伝を踏まえた内容。

以後、注で引用する『晋書』王羲之伝の訳は、興膳宏訳『晋書』王羲之伝（『世界文学大系七二中国散文選』筑摩書房一九六五）から引用する。本

作の押韻は、入声八類の一つ第一類（屋・沃）である。屋韻は、屋、宿、目、木、穆、淑、谷、覆、肅、獨、福、腹。沃韻は、玉、足、辱、慾、局、

曲、縁。換韻が不規則であるが、第四句までを第一段落、第五句から第十句までを第二段落、第十六句から第十九句までを第三段落とした。訳文

は段落ごとに改行した。詩中の「斯人」は陰潤を意味し、第一段落・第三

段落が陰潤に関する内容、第二段落が王羲之に関する内容として解釈した。

擾擾 騒ぎ乱れる様のこと。『國語』晉語六「唯有諸侯、故擾擾焉、凡諸侯

難之本也。」

京華 首都。北京のこと。晋郭璞「遊仙詩」一「京華遊俠窟、山林隱遯

棲。」

衣冠 衣と冠のこと。『管子』形勢「言辭信、動作莊、衣冠正、則臣下肅。」

今製 現代の形式。

扶攜 （人に）手を貸す。支え助ける。唐韓愈・唐故河南令張君墓誌銘「月

餘、免符下、民相扶攜、守州門、叫謹為賀。」

息心 俗な思いを排除すること。唐岑參「終南雙峰草堂」詩「歛跡歸

山田、息心謝時輩。」

虛曠 虚しい。『後漢書』南匈奴傳論「若因其時勢、及其虛曠……使耿國之

筭不謬於當世、袁安之議自從於後王、平易正直、若此其弘也。」

榮辱 栄光と恥辱のこと。『易经』繫辭上「言行、君子之樞機。樞機之發、

榮辱之主也。」

玄漠 静寂。晉葛洪『抱樸子』至理「識變通於常事之外、運清鑒於玄漠之

域。」

太初 太古の時代。唐吳筠「高士詠」序「太初渺邈、難得而詳。」

棲宿 寄寓すること。仮の住まい。『列子』湯問「江浦之間生麼蟲、其名曰

焦螟、羣飛而集於蚊睫、弗相觸也。棲宿去來、蚊弗覺也。」

柔翰 毛筆のこと。『文選』左思・詠史「弱冠弄柔翰、卓犖觀羣書。」劉良

の注に「柔翰、筆也」とある。

驚龍 飘逸で洒脱な振る舞いのこと。『晋書』王羲之の伝に「論者稱其筆勢、

以為飄若浮雲、矯若驚龍。(羲之の書を論する者はその筆づかいを評して、

「軽やかさは風にただよう雲を思わせ、たくましさは空馳せめぐる龍を思

わせる」といった。)

骨鯁 剛直な様。『晋書』王羲之の伝に「及長辯贍、以骨鯁稱。(成人するに

及んで、辯舌さわやかに、硬骨漢として世に称えられた」とある。

『史記』吳大伯世家「方今吳外困於楚、而內空無骨鯁之臣、是無奈我何。」

王隱 王隱(生没年不詳)、字は允叔。豫州陳郡陳の人。『晋書』卷八十二

に伝記がある。父は王銓。寒門の出であったが、博子多聞であった。大興

元年に、王隱は召されて著作郎となり、晋の史書を書くように命じられる。

後に、虞預によって排斥される。晋書の執筆が厳しくなった王隱は、武昌

で征西將軍の庾亮に援助を求め、ようやく晋書を完成させた。

直木 真つ直ぐな木。『莊子』外篇・山木「直木先伐、甘井先竭」才能を有

する者は、早くその才能を使い果たし、衰退してしまう喩え。『王隱晋書』

卷七・王羲之の全文は、「王羲之幼有風操、郗虞卿。聞王氏諸子皆俊、令

使選壻。諸子皆飾容以待客、羲之獨坦腹東床嚼胡餅、神色自若、使具以告

虞卿曰、此真吾子壻也。問為誰、果是逸少、乃妻之。王羲之初度江、會稽

有佳山水、名士多居之、與孫綽、許詢、謝尚、支遁、等、宴集於山陰之蘭

亭。」である。直木とは評していない。

桓温 桓温(三二二—三七三)、字は元子。譙国龍亢の人。蜀を滅し、征西

大將軍となる。後に、前秦の苻健、姚襄を攻め落として功績を挙げるも、

前燕に敗れて名声も失墜する。簡文帝をたて、禪讓を迫るも失敗した。

桓温誓止之、朝宁遜有愆 王羲之が桓温に当てた尺牘のことか。

朝宁 朝廷。明 張居正 『謝賜敕諭並銀記疏』「念臣頃以微情 上幹高聽、

仰蒙矜憫 特賜允俞 犬馬之忠 既少伸於朝寧 烏鳥之願 兼追盡於家園」

誓誓文 誓文を告げるということ。『晋書』王羲之伝に「羲之深恥之、遂稱

病去郡、於父母墓前自誓曰、維永和十一年三月癸卯朔、九日辛亥、小子羲

之敢告二尊之靈。羲之不天、夙遭閔凶、不蒙過庭之訓、母兄鞠育、得漸庶

幾、遂因人乏、蒙國寵榮、進無忠孝之節、退違推賢之義、每仰詠老氏、周

任之誠、常思死亡無日、憂及宗祀、豈在微身而已。是用寤寐永歎、若墜深

谷、止足之分、定之於今。謹以今月吉辰肆筵設席、稽顙歸誠、告誓先靈。

自今之後、敢渝此心、倉冒苟進、是有無尊之心而不子也。子而不子、天地

所不覆載、名教所不得容。信誓之誠、有如皦日。(そして、父母の墓前に誓

つて言うには、「今永和十一年三月癸卯の九日辛亥、子なる羲之、父母の

御魂の前に申す。羲之は不幸にして早く父上を失い、その教えを受けるこ

となく、母上兄上に育てられて、どうやら賢才の列に加わり、人材の乏し

さが身に幸いして、国家の恩寵を受けました。しかし積極的には忠孝の務

めを尽くさず、消極的には賢者を推薦すべき職分にもとるこの私です。常

にいにしえを振り仰いで進退についての老子周任の誠めを繰り返し、い

つも日ならずして身の破滅に至ることを恐れています。不幸は祖先にまで

も及び、決して我が一身にのみとどまるものではありません。かくて寝て

も醒めても嘆きは断えず、深い谷底に落ちたように気は滅入ります。私は

出処の分際を只今はつきりと定めます。謹んで今月の吉日を選び、筵席を

敷きのべて、祭壇に額つき心をこめて、父母の靈に誓います。以後もしこ

の志を変えて、かりそめの出世に心を奪われるなら、父母をないがしろに

扱うわけであり、もはや子としての資格はありません。子でありながら子

としての資格を失った者は、天地もその存在を許さず、道徳も断じて容赦

いたしません。私の真心からの誓いは、白日の如く明らかであります。」

とある。

淵穆 極めて美しいこと。『文選』班固・典引「有於德不台淵穆之讓、靡號

師矢敦奮搗之容。」蔡邕の注に「淵穆、深美之辭也。」とある。

渡江終焉志 『晋書』王羲之伝に「羲之雅好服食養生、不樂在京師、初渡

浙江、便有終焉之志。(羲之は日ごろ仙薬を服して長寿の法を行ない、都

の生活を不本意に思っていた。そこで浙江を渡って会稽の地にやって来た

時から、この地で生涯を送る気になった。)とある。

時から、この地で生涯を送る気になった。)とある。

時から、この地で生涯を送る気になった。)とある。

時から、この地で生涯を送る気になった。)とある。

時から、この地で生涯を送る気になった。)とある。

時から、この地で生涯を送る気になった。)とある。

不憚與許邁 采藥窮山谷 終乃以樂終 『晋書』王羲之伝に「羲之既去官、

與東土人士盡山水之游、弋釣為娛。又與道士許邁共修服食、採藥石不遠千

里、徧游東中諸郡、窮諸名山、泛滄海、歎曰、我卒當以樂死。(羲之は官

途を去ると、東方の人士とともに自然の遊びを存分に尽くし、狩や釣りを

楽しんだ。また道士の許邁とかたらつて仙薬の術を行ない、薬用の石を求

めて千里の道も厭わず、浙東諸郡を巡り歩き、幾多の名山の奥底に深く入

り、また海に舟を浮べては探し求めた。彼は嘆息して言った。「私は結局

快樂の中で死ぬのだろうな。」とある。許邁(生卒年不詳)、字は叔玄。

丹楊郡句容の人。出自は士族であり、氣質は物静かで、官に仕えることを

羨まなかつた。神仙術を学び、広く名山に遊んだ。永和二年に安西山に移

り住むにあたり、名を玄、字を遠遊に改めた。王羲之と世俗を脱した交わ

りをなした。

掩覆 覆い隠すこと。『三國志』魏誌曹袁傳「其微過細故、當掩覆之。」

耿肅 耿は清いこと。肅は清らかなこと。汚れなく美しい。

大端 事の主要な部分。『後漢書』隗囂傳「新都侯王莽、慢侮天地、悖道逆

理……今略舉大端、以喻吏民。」

幽獨 静寂で孤独なこと。『楚辭』九章涉江「哀吾生之無樂兮、幽獨處乎山中。」

景行 高尚な徳行のこと。『詩經』小雅車輦「高山仰止、景行行止。」鄭玄

の箋に「古人有高德者則慕仰之、有明行者則而行之。」とある。

墨瀋 瀋は汁。墨汁のことか。

賢達 賢人。漢王充『論衡』效力「文儒非必諸生也、賢達用文則是矣。」

勁節 節操が固いこと。南朝梁範雲「詠寒鬆」に「凌風知勁節、負雪見

貞心。」とある。

後福 将来・晩年の幸福のこと。『後漢書』左雄傳「白璧不可為、容容多後

福。」

晤對 顔を合わせて語り合うこと。宋王謙『唐語林』豪爽「又有少年

勢似疎簡、自雲辛氏郎君、來謁丞相。於晤對之間、未甚周至。」

以坦示為腹 『晉書』王羲之伝に「時太尉郗鑒使門生求女婿於導、導令就

東廂徧觀子弟。門生歸、謂鑒曰、王氏諸少並佳、然聞信至、咸自矜持。惟

一人在東牀坦腹食、獨若不聞。鑒曰、正此佳婿邪。訪之、乃羲之也、遂以

女妻之。(ある時に、太尉の郗鑒が書生を王導のもとにやって、娘婿を選

ばせた。導は書生を若者たちの住む東の棟にやって、一わたり一門の子弟を見せた。書生が帰って郗鑒に告げるには、「王氏の若殿がたはどなたもご立派ではありませんが、旦那さまの使いが来たというので、皆なことさらにとりつくろっていらっしやいました。中でただ一人、東側の寝台に腹はいになつてものを食べていらっしやる方がありまして、全くとどこ吹く風といった様子でした。」鑒は「これこそ良き娘増じゃ」といって、調べてみるとそれが王羲之だった。そこで彼に娘を妻あわせた。」とある。

悠縮 (時間が) 長い。『晉書』文苑傳庾闡「嗚呼、大庭既遠、玄風悠縮、皇道不以智隆、上德不以仁顯。」

再拜 二度お辞儀をすること。『論語』郷黨「問人於他邦、再拜而送之。」

纂 のべる。記述すること。著すこと。

心曲 心の深いところ。『詩經』秦風・小戎「言念君子、溫其如玉、在其板屋、亂我心曲。」鄭玄の箋に「心曲、心之委曲也。」とある。

望望 遠望すること。名残惜しむこと。『禮記』問喪「其往送也、望望然、

汲汲然、如有追而弗及也。」鄭玄の注に「望望、瞻顧之貌也。」とある。

終古 (時間が) 長い。『楚辭』離騷「懷朕情而不發兮、餘焉能忍而與此終古。」

朱熹の集注に「終古者、古之所終、謂來日之無窮也。」とある。

山光 山の景色。南朝梁 沈約「泛永康江」詩「山光浮水至、春色犯寒來。」

18 論黃道周書

刻僕字者鈞多漸滅、隨其浸潤、踵之訛也。大作斂鸞囚籠、異狀紛披、不區區襲開元、大曆之法矣。野火都離、枝葉漸脫、又帶天狀幽冷之致、眞古人不及。嘗論之士盍老職止能聾人目、鈞樂廣散止能聾人耳。若能悅人神、則足下之作歟。邨原之從孫嵩、獨推鄭康成、僕今亦如是。

黃道周の書を論ず

僕の字を刻する者は鈞は漸滅多く、其の浸潤に随ひ、之を踵(つ)ぐは訛(あやま)りなり。大作は斂鸞囚籠、異狀紛披、區區として開元、大曆の法を襲はず矣。野火都(すべ)て離(かか)り、枝葉は漸く脱し、又た天狀幽冷の致を帯び、眞に古人の及ばざるところなり。嘗て之を論ずるに古盍老職は、止(た)だ能く人の目を聾(はなやかに)す、鈞樂廣散は止だ能く人の耳を聾やかにす。能く人の神を悦ばすが若きは、則ち足下の作か。邨原の孫嵩に從ふや、獨り鄭康成を推す、僕も今亦た是くの如し。

私の字を刻したものは筆画に消えてしまったものが多く、滲んだり膨らんだ字体に従って我が書法を学ぶことは間違っている。黄道周どのの優れた作品は鳳凰や龍が内に閉じ込められたようで、常とは異なる形態があちこちに見られ、開元、大暦年間を代表する李邕、張旭・顔真卿・懷素等の古人の書法をこせこせとは踏襲していない。野火がすべてを焼き払い、木々の枝葉がしだいに落ち尽くし、さらに天然の奥深い冷やかな情趣を帯びたようで、本当に開元、大暦の古人も及ばない境地である。以前論じたように、古代の器や圭は、ただ人々の目を華やかにし、天界の音楽や嵇康の広陵散は、ただ人々の耳を心地よくするだけである。人の精神を喜ばせることができるものは、黄道周の作品であろうか。邴原が孫高に従って学ぼうとしたとき、孫高はただ鄭玄を推薦した。私もまた今黄道周の書を推薦する。

注

論黄道周書 『擬山園選集』(文集) 卷五十・書牘一収録の「與石益」。

黄道周 一五八五—一六四六。明末の政治家、書家。字幼元、号石齋。福建・漳浦の人。王鐸と同じく天啓二年(一六二二)の進士。明の滅亡後、

南京で南明の弘光帝に仕え、南京陥落後、福州で南明の隆武帝に仕えたが、

清軍に捕まり、南京で処刑された。

漸滅 消失すること。元・劉壎『隱居通議』雜錄「往時故蹟、銷磨漸滅、

後生小子、無復能之。」

浸潤 次第に浸透すること。『論語』顔淵「浸潤之譖、膚受之愬、不行焉、

可謂明也已矣。」とあり、何晏の集解で鄭玄の「譖人之言、如水之浸潤、

漸以成之。」が引かれている。

斂鸞 斂は鳥籠。『楚辭』九章・懷沙「鳳皇在斂兮、雞鶩翔舞。」

異狀 奇怪な外形。『荀子』正名「物有同狀而異所者、有異狀而同所者、可

別也。」

紛披 散乱。北周・庾信「枯樹賦」に「紛披草樹、散亂煙霞。」とある。

開元、大暦之法 開元は唐・玄宗の年号(七一三—七五五)、大暦は唐・代宗

の年号(七六六—七七九)。法は法の異体字。開元、大暦年間には、李邕、

張旭、顔真卿、懷素などが台頭する。

天狀 自然な趣や情趣。狀は然の異体字。

盃 五味を調えるために使う器。『廣韻』に「調五味器」とある。古代の酒器。

璫 高貴な人が所持する圭のこと。『説文』に「桓圭、公所執。」とある。

鈞樂 天界の音楽。鈞樂の由来は、『史記』趙世家「簡子癘、語大夫曰、我

之帝所甚樂 與百神遊於鈞天 廣樂九奏萬舞 不類三代之樂 其聲動人心」に拠る。

廣散 広陵散という琴の曲名のこと。『晉書』嵇康傳によれば、三国時代・

魏の嵇康が広陵散を弾き、彼の死とともに消失したとしている。後の明代・朱権『神奇秘譜』上巻に復元されたものが収録される。

邴原 後漢の学者。生没年不詳。字は根矩。青州北海郡朱虚県の人の人。

陳寿『三国志』の『魏書』卷十一「袁張涼国田王邴管伝」の注に『邴原別伝』が引かれる。それによれば、『孝経』『論語』を暗誦した邴原は、遠くに遊学したいと考え、孫松（字は賓碩、安丘の人）の所に足を運ぶ。孫松は邴原に対して「あなたと同郷である鄭玄を知っているか」と尋ね、邴原がその問いに応じた後、孫松は「隣家に鄭玄という孔子のような存在がいるにも関わらず、私に教えを請うのか」と再び尋ねる。

鄭康成 鄭玄（一二七二〇〇）、後漢の学者。高密の人。『毛詩』『周礼』『儀礼』『礼記』などに注釈を施す。

評帖匪易、勿覺乎大昵也。又不可曰輕眇。如醫家診脈、按其刻澗紙形、字中首淺深、骨貌陰陽、元氣無羸、斯固宋榻之卓異者、蓋古人奧旨、其精光隱現楮墨外、疑音聲響、斷不能埋沒、實育物焉。曰魂魄之不徒在靈氣翔踊間議也。顧僕于是沈玩數四、不敢援其外勝、薄其內存者、區區不眠、為此故耳。凡帖又不可彊其未圓、疵其工于色之鮮好也。大抵笨多、涌霧隱厚少、是神不充實、僕胸中所目不能長育此帖、匪診之諦、敢薄視歟。足下或不啞狀目為無當也。

又た駿公に與ふ

帖を評するは易きに匪ず、大いに昵（よくみ）るを賣ふこと勿れ。又た曰て輕眇する可からず。醫家の診脈の如く、其の刻法紙形、字の中に淺深育る、骨貌の陰陽、元氣羸無きを按ずれば、斯れ固より宋榻の卓異なる者なり。蓋し古人の奥旨は、其の精光楮墨の外に隱現し、聲響育りかと疑ひ、斷じて埋没すること能はず、實に物育り焉。魂魄の、徒だに靈氣の翔踊する間に在るのみにあらざるを曰て議するなり。顧みるに僕は是に于て沈玩すること數四なるも、敢て其の外に勝れるを援（ひ）き、其の内存せる者を薄（かろ）んぜず、區區として昵（よくみ）ざるは、此れが為（ため）の故のみ。凡そ帖は又た其の未圓なるを彊（つよ）め、其の色の鮮好なるに工（たくみ）なるを疵（そ）しるべからず。大抵（たいてい）笨なること多く、涌霧隱厚たること少し。是れ神充實せざるなり。僕の胸中に長（つね）に此の帖育ること能はざる所目（ゆゑん）は、診ること之れ諦（つまびら）に匪ずして、敢て薄視するか。足下或いは啞狀として、目て當たること無しと為（せ）ざらんや。

三

1 又與駿公

法帖を評価することは簡単ではない。よく熟視することを尊んではならないが、また、法帖を軽々しく見てもいけない。医者が脈を診るように、法帖の彫刻の仕方や紙の形式、文字の深淺の有様、骨気の強弱、エネルギーの充実を考慮すると、この法帖は確かに宋拓の優れたものである。思うに、古人の奥義は、その輝きが法帖の外にかすかに現れるもので、声の響きがあるのかと疑われるようで、決して埋没することはあり得ず、まさしくそこに実体があるのである。それは靈魂が、勇ましい気が飛び交っている空間にだけ存在するのではないという点から議論するのである。振り返ってみるに、私はそこでこの法帖を何度も静かに検討したが、あえて外面的な優秀さを評価しその内面を軽視するようなことはせず、(外形のみを)熟視することをしなかったのは、この理由に依るのである。一般的に法帖は、決してその円熟していない部分を強調したり、墨色の鮮やかさに優れている点を誇るべきではない。そうした法帖は大抵良くないものが多く、力強い精気や穏やかな奥行きが少ないのであり、神秘的なものが充実していないのである。私の胸中にこの法帖が常には存在しない理由は、詳細に観察せず、あえて軽視しているからであろうか。あなたはもしかしたら、啞然として、君の考えは当たっていないとお思いにならないだろうか。

注

又與駿公 これは、「王鐸書論選注」における「與吳偉業論刻帖」の内容で、『擬山園選集』巻五十七・書牘八に収録される。しかし、薛龍春(『王鐸年譜長編』第三册)によれば、この文章は吳偉業ではなく、順治三年の四月初めに戴明説に対して書いたものであり、『擬山園帖』第一に刻入されているという。吳偉業は、太倉(江蘇省)の人。字は駿公。号は梅村。崇禎四

年(一六三二)の進士。

眊 眊の譌字。『正字通』「眊字之譌。字彙意義混同。眊、非。」眊は、眊の古字。眊は、物を言わずにじっと見ること。ここでは、「よくみる」と訓読した。

醫家 医者。『漢書』卷三四黥布傳「醫家與中大夫賁赫對門。赫乃厚饒遺從姬飲醫家。」

診脈 脈を診察すること。『史記』扁鵲倉公列傳「扁鵲以此視病。盡見五臟癥結。特以診脈為名耳。」

陰陽 天地の間に存在する万物を構成する二氣のこと。ここでは、強弱。『易経』繫辭上「陰陽不測之謂神。」

元氣 万物を生み出す根本のこと。『後漢書』趙諮傳「夫亡者。元氣去體。貞魂遊散。反素復始。歸於無端。」

羸 つかれる。衰えた様、疲れ切った様のこと。

宋楊 宋代の拓本のこと。

卓異 抜き出て優れていること。『漢書』宣帝紀「恩惠卓異。厥功茂焉。」

奧旨 奥義。唐王勃「續書序」に「爰考奥籍。共參奥旨。」とある。

精光 輝き。『後漢書』馮衍傳下「究陰陽之變化兮、昭五德之精光。」

隱現 ぼんやりと出現すること。

楮墨 紙と墨のこと。唐劉知幾『史通』暗惑「無禮如彼。至性如此。猖狂生態。正復躍見楮墨間。」

聲響 声の響き。『荀子』宥坐「夫水若有決行之、其應佚若聲響。其赴百仞之穀不懼、似勇。」楊倞注「若聲響、言若響之應聲也。」

有物 実体があること。『易経』家人「風自火出。家人、君子以言有物。而行有恆。」

魂魄 靈魂『左傳』昭公七年「匹夫匹婦強死、其魂魄猶能馮依於人、以為淫厲。」

蜂氣 銳利な氣のこと。『漢書』趙廣漢傳「所居好用世吏子孫新進年少者、專厲壯蠶氣、見事風生、無所回避、率多果敢之計、莫為持難。」顏師古注「蠶與鋒同、言鋒銳之氣。」

翔踊 物価が急上昇すること。『新唐書』馬燧傳「於時天下蠱、兵艱食、物貨翔踊。」

沈玩 深く賞玩すること。

數四 何度となく繰り返すこと。『東觀漢記』張純傳「時舊典多闕、每有疑義、輒為訪純、自郊廟婚冠喪紀禮儀、多所正定、一日或數四引見。」

鮮好 鮮やかで美しいこと。漢 應劭『風俗通』正失主陽能鑄黃金「漢書說王陽雖儒生、自寒賤、然好車馬衣服、極為鮮好、而無金銀文繡之物。」

大抵 おおたか。『史記』秦始皇本紀「自關以東、大氏盡畔秦吏應諸侯、諸侯鹹率其眾西鄉。」

笨 粗雑なこと。

隱厚 落ち着きがあつて、忠実で情に厚いこと。『史記』韓長孺列傳論「餘與壺遂定律歷、觀韓長孺之義、壺遂之深中隱厚。」

参考…『擬山園帖』第一「與戴明說」

評帖匪易、勿譽乎太昵也、又不可輕眎睨蹠、如醫家診脈、按其刻瀟、締形、字有不淺、骨貌、陰陽、眞神無羸、元氣不傷、斯固宋榻之卓異者、蓋古人奧旨、其精光隱現楮墨外、疑有聲響、斷斷不能埋沒、所以爲今帖易、爲古帖難。千垂來縣縣不死者、實有物焉。以厚其魂魄、不徒彊猛、但恃蠶氣翔踊間議也。於是沈玩數四、不敢飾所不及、援其外勝、薄其內存者、區

區不昵、為此故耳。信虛凡帖不可木彊末圓。疵其色於鮮好、大氏笨多、涵露隱厚少也。是故神不充實。僕曾中所以不能久有此帖、匪診之諦、敢薄眎以埋沒其精光而重冤之虐。僕輒用輕為趨發、披露無徇。足下或不啞狀笑以為迂且無當也、如庸醫之誤診也者、僕始不枉一片矚視矣。有客遠來、對坐裁報十冊。檢收之。復巖壑老先生閣下。弟王鐸頓拜、沖後。

戴明說に與ふ

帖を評するは易きに匪ず、太昵を譽ぶこと勿れ、又た輕眎睨蹠すべからず。醫家の診脈のごとく、其の刻瀟締形、字に淺からざる有る、骨貌の陰陽、眞神の羸無き、元氣の傷めずを按ずれば、斯れ固より宋榻の卓異たる者なり。蓋し古人の奧旨は、其の精光楮墨の外に隱現し、聲響有るかと思ひ、斷斷埋沒すること能はず。所以(ゆゑ)に今帖を為(まな)ぶは易く、古帖を為(まな)ぶは難し。千垂來縣縣として死せざる者は、實に物有り焉。其の魂魄の、徒だに彊猛なるのみならず、但だ蠶氣翔踊の間を待みて議するを厚(おもん)ずるを以てすればなり。是に於いて沈玩すること數四、敢て及ばざる所を飾り、其の外勝を援き、其の內存する者を薄(かろん)ぜず、區區として昵(よくみ)ざるは、此が為の故のみ。信なるかな凡そ帖は木彊末圓なるべからず。其の色を鮮好に疵(そし)るは、大氏笨多く、涵露隱厚少なきなり。是の故に神は充實せず。僕の曾中に久しく此の帖有る能はざる所以は、診ることの之れ諦(つまびら)かなるに匪ず、敢て薄眎して以て其の精光を埋沒して重ねて之に冤(ぬれぎぬをき)せんや。僕は輒ち用て輕しく趨發を為せば、披露すれども徇(あまね)きこと無れ。足下或いは啞狀として笑ひ以て迂にして且つ無當なり、庸醫の誤診の如きなりと為さざれ者(ば)、僕は始めより一片の矚視を枉げざりき矣。

客の遠來する有りて、對坐して十冊を裁報す。之れを檢收せよ。巖峯老先
生閣下に復す。弟王鐸頓拜す、後を冲(あ)く。

法帖を評価することは容易なことではなく、あまりにも(外形のみを)
熟視してはならない。また、法帖を軽視したり慌てて見てもいけない。医
者が脈を診察するように、法帖の刻法、紙の形、字の奥深さ、骨気の強弱、
生き生きとして弱弱しさが無い点、エネルギーに溢れていることを考慮す
ると、これは言うまでもなく宋拓の特に優れたものである。思うに、古人
の奥義は、その輝きが紙と墨の外にかすかに出現し、声の響きがあるかと
疑われるようで、けつして埋没することはあり得ない。そのため、今の書
家の法帖を学ぶのは簡単であり、古代の書家の法帖を学ぶのは難しいので
ある。千年来の長きに渡り消失しなかったものは、まさしく実体があるの
である。その靈魂が、ただ勇壯で、鋭い気が飛び交う空間を頼りにして議
論しているだけではないことを重視するためである。そのため、私はこの
法帖を何度も静かに検討し、あえて自分の能力の及ばないところを飾りた
てたり、外面的な優秀さを評価しその内面を軽視するようなことはせず、
(外形のみを)熟視することはしないのは、この理由に依るのである。一
般的に法帖は、素朴で力強かったり円熟していないものは駄目であるとい
うのは本当である。法帖の色合いが鮮やかであることを誇るといふのは、
そうした法帖は大抵良くないものが多く、潤いや穏やかな奥行きが少ない
からである。このために、神秘的なものが充実していないのである。私の
胸中にこの法帖が久しくは存在しえない理由は、詳細に観察せず、あえて
軽視して、その輝きを埋没させ何度もこの法帖に濡れ衣を着せているから
であろうか。私は軽々しく飛躍した発言をみだりにしているので、口外し

ても広めないようにしてくれ。あなたは或いは笑いとばし、私の考えが回
りくどく価値のないものであり、ヤブ医者で誤診を下したようなものであ
ると思わないならば、私は最初から一枚の黄色い紙を無駄にはしなかつた
ことになる。遠方からの來客があり、対面して座り十冊を鑑定した。点検
して受け取られよ。戴明説に返答を申し上げる。王鐸は頓拜する。左冲。

注

與戴明説 底本は『精拓擬山園帖 全五冊』(書藝会、一九九二)である。
戴明説(生没年不詳)、字は道默、号は巖峯。滄州の人。崇禎七年(一六
三四)の進士。官は戸部主事、兵科給事中となる。李自成が北京を陥落さ
せた際、一時彼らに降つたが、李自成らが敗走するに及んで原籍に帰る。
順治元年に原官に起用されて、十二年には戸部尚書に至るが、十七年に礼
制に反したとして免官、官を辞す。戴明説の伝記は、『清史列伝』卷七十
九に収録される。

睨 睨の譌字。『正字通』「睨字之譌、字彙意義混同、非。」睨は、睨の古
字。睨は、物を言わずにじっと見ること。

眇 眇は視の古字。

睨 睨は、睨むこと。躁は、焦ること。

醫家 医者。『漢書』卷三四黥布傳「醫家與中大夫賁赫對門、赫乃厚餽遺
從姬飲醫家。」

診脈 脈を診察すること。『史記』扁鵲倉公列傳「扁鵲以此視病、盡見五臟

癥結 特以診脈為名耳。」

緋形 紙の形。緋は紙の異体字。

骨貌 骨力の様。

羸 つかれる。衰えた様、疲れ切った様のこと。

元氣 万物を生み出す根本のこと。『後漢書』趙諒傳「夫亡者、元氣去體、貞魂遊散、反素復始、歸於無端。」

宋楊 宋代の拓本のこと。

卓異 抜き出て優れていること。『漢書』宣帝紀「恩惠卓異、厥功茂焉。」

奧旨 奧義。唐王勃「續書序」に「爰考厥籍、共參奧旨。」とある。

精光 輝き。光は光の異体字。『後漢書』馮衍傳下「究陰陽之變化兮、昭五德之精光。」

隱現 ぼんやりと出現すること。

楮墨 紙と墨のこと。唐劉知幾「史通」暗惑「無禮如彼、至性如此、猖狂生態、正復躍見楮墨間。」

聲響 声の響き。『荀子』宥坐「夫水若有決行之、其應佚若聲響。其赴百仞之穀不懼、似勇。」楊倞注「若聲響、言若響之應聲也。」

斷斷 きつと、確実に。宋蘇軾「晁繹先生詩集」敘「繫繫乎如五穀必可以療饑、斷斷乎如藥石必可以伐病。」

縣縣 連続して絶えないこと。『詩經』王風葛藟「縣縣葛藟、在河之滸。」毛傳「縣縣、長不絶之貌。」

有物 実体があること。『易經』家人「風自火出、家人、君子以言有物、而行有恆。」

魂魄 靈魂。『左傳』昭公七年「匹夫匹婦強死、其魂魄猶能馮依於人、以為淫厲。」

強猛 強くて荒々しいこと。

蓬氣 蜂氣とも書く。鋭利な気のこと。『漢書』趙廣漢傳「所居好用世吏子孫新進年少者、專屬強壯蓬氣、見事風生、無所回避、率多果敢之計、莫為

持難。」顏師古注「蓬頭鋒同、言鋒銳之氣。」

沈玩 深く賞玩すること。

數四 何度となく繰り返すこと。『東觀漢記』張純傳「時舊典多闕、每有疑義、輒為訪純、自郊廟婚冠喪紀禮儀、多所正定、一日或數四引見。」

木彊 素朴で力強いこと。

鮮好 鮮やかで美しいこと。漢應劭『風俗通』正失「主陽能鑄黃金」漢書說「王陽雖儒生、自寒賤、然好車馬衣服、極為鮮好、而無金銀文繡之物。」

大氏 おおかた。『史記』秦始皇本紀「自關以東、大氏盡畔秦吏應諸侯、諸侯鹹率其眾西鄉。」

笨 粗雑なこと。

涵露 潤いがあること。

隱厚 落ち着きがあつて、忠実で情に厚いこと。『史記』韓長孺列傳論「餘與壺遂定律歷、觀韓長孺之義、壺遂之深中隱厚。」

冤 無実の罪。

披露 表立って示すこと。『後漢書』蔡邕傳「以邕經學深奧、故密特稽問、宜披露失得、指陳政要、勿有依違、自生疑諱。」

徇 広く知らせること。

啞然 驚き呆れて何も言えないさま。

庸醫 敷医者。宋蘇軾「策略二」に「此庸醫之所以為無足憂、而扁鵲倉公之所望而驚也。」とある。

幪幪 『廣韻』入聲・赫・幪、幪幪赤紙。又通作赫。』とある。『漢書』外戚傳「武發篋中有裏藥二枚、赫蹠書。」顏師古注引應劭曰「赫蹠、薄小紙也。」籍武が小箱を開くと、中には二粒の丸薬と一枚の薄い小さな黄色の紙片があつた。成帝の命令で、成帝の子供を産んだ曹宮に丸薬を飲んで自

殺をせよという内容。これは、すべて成帝の寵姫である趙飛燕・趙昭儀姉妹の差し金であった。

對坐 向かい合つて座ること。

裁報 良し悪しを判断して申すこと。

檢收 調べて手にすること。

冲後 左冲。清顧張思『土風錄』卷九「冲者、虚也。卑者上書所尊、必虚其左、以請批答也。即古人書謹空之義。當由官署中嫌空字不佳、故改為衝。今人札無餘紙、而亦書冲、失其義矣。」

2 跋五弦少司空褚臨蘭亭墨跡

山東文絃李君得善書蘭亭、紙故墨勞、似數百季物、或曰為雙鈎廓填、予觀之曰、其不狀焉。斯褚登譜之為焉。臨昭陵原書、世不易育也。予跡江南北、幾徧天下、惟此與潁州為一腕、所書飛越無心、別育仙趣、若一母之子而變焉、超定武刻、汴中本而上之。時虞山錢牧齋在席、亦極驚賞、且末育柳貫、鄧文原諸跋在。夫世遠傾圮、同歸于盡、何物不爾。獨此書特出干煤塵、豈偶狀哉。觀書猶觀山、升嶽嫌衆山之列施也。後之君子、欲見昭陵帖、觀此書斯過半矣。

五弦少司空の褚臨蘭亭墨跡に跋す

山東文絃李君は善書蘭亭を得。紙故（ふる）く墨勞（つか）れ、數百季の物に似たり、或ひとは曰て雙鈎廓填と為すも、予は之を觀て曰く、其れ狀らざらんか。斯れ褚登譜の為すかと。昭陵の原書を臨するは、世に育すること易からざるなり。予は江の南北を跡（たず）ね、幾（ほとん）ど天下を徧くするも、惟だ此れと潁州とは一腕為りて、書する所飛越無心、別に仙趣育り。一母の子にして躰（れん）なるがごとく、定武刻汴中本を超

えて之を上とす。時に虞山錢牧齋席に在り、亦た極めて驚賞す。且つ末に柳貫、鄧文原諸跋の在る育り。夫れ世は傾圮に遠きも、同じく盡に歸す。何物の爾（しか）らざらん。獨り此の書のみ特に煤塵より出づ、豈に偶狀ならんや。書を觀るは猶ほ山を觀るがごとし、嶽に升（のぼ）りて衆山の列施（りし）たるを嫌ふ。後の君子、昭陵帖を見んと欲するに、此の書を觀れば斯れ半ばを過ぐ。

李化熙どのが優れた蘭亭序を入手した。紙は古く墨色に覇気がないので、數百年の時を隔てた作品のようである。ある人はこの蘭亭序は雙鈎廓填墨されたものだ判断したが、私はこの蘭亭序を鑑賞して、「そうではないのではないか。この蘭亭序は褚遂良が臨書したものであろうか」と述べた。眞跡の蘭亭叙を臨書した作品は、世間にそうあるものではない。私は長江の南北を尋ね、天下のほとんどを巡り歩いたが、ただこの蘭亭序と潁上本と同じ作者のものであり、その書は世俗を超越し無心であり、仙界の趣がある。一人の母親から生まれた双子のように似ており、定武本を凌いでこの蘭亭序と潁上本が優れている。そのとき錢謙益も臨席していたが、彼も私と同様に非常にこの作品を驚嘆して褒め称えた。かつ、末尾に柳貫、鄧文原らの諸跋が記されている。そもそも、いま世の中は平和であるが、全ては同じく灰燼に帰す運命であり、何物もそれを逃れるすべはない。ただこの書だけが特に戦火を逃れてきたことは、偶然ではない。書を鑑賞することは、ちょうど山を見るようであり、山頂にたどり着いてはじめて、山々がさらに連なっているのを知り、それを恨めしく思うのである。後の君子が眞跡の蘭亭序を見たいと思うなら、この蘭亭序を鑑賞すれば、半分は目的が達せられることになるのである。

注

五弦少司空褚隨蘭亭墨跡 『擬山園選集』(文集)卷三十八・題跋一に収録。

五弦少司空は、李化熙のこと。李化熙、字は五弦。山東長山の人。崇禎七年の進士。官は初め浙江湖州府推官となる。後に四川巡撫となる。清朝に降りた後、工部右侍郎となり、累遷して刑部尚書となる。李化熙については、『清史列伝』卷七十八に伝記がある。『王鐸年譜長編』第三冊によると、本跋文は順治二年(一六四六)の時のものであるという。少司空は、工部右侍郎の別名。

山東文綏李君 前述の李化熙のこと。又は五の異体字。

得 得の異体字。

蘭亭 王羲之の蘭亭序のこと。永和九年(三五三)三月三日、王羲之は名士四十一人を蘭亭に招き、曲水の宴を催す。その時に作られた詩の序文として王羲之が書いた草稿が蘭亭序である。蘭亭序の原本は七世の孫・智永に継承され、後に唐の太宗に伝わり、太宗が蘭亭序を酷愛した故に昭陵に随葬させたと言われている。太宗は蘭亭序の双鉤填墨本を馮承素などに、臨本を歐陽詢などに作らせた。参考・西林昭一 二〇〇七「蘭亭叙」書字書道史学入会編『日本・中国・朝鮮書道史年表事典』(改訂版)菅原書房 p.124

紙故墨勢 紙が古く、墨色に覇気がないこと。

數 数の異体字

季 年の異体字

目 以の異体字

雙鉤填墨 双鉤填墨のこと。双鉤とは原本上に薄い紙を置き、文字の輪郭を写すこと。填墨とはその写した文字の輪郭線内に墨を入れること。三の丸宝蔵館が所蔵する王羲之「喪乱帖」は双鉤填墨本である。参考・玉村清司 二〇〇七「双鉤填墨」書字書道史学入会編『日本・中国・朝鮮書道史年

表事典』(改訂版)菅原書房 p.128

狀 然の異体字

𠂔 乎の異体字

褚遂良 褚遂良のこと。字は登善。錢塘の人。褚亮の子。官は諫議大夫、中書令となり、高宗の時に河南郡公に封ぜられ、褚河南とも称される。累進して吏部尚書、尚書右僕射となるが、武則天を皇后に立てることに反対して潭州、愛州に左遷される。欧陽詢、虞世南、薛稷らとともに初唐の四大家と称される。彼の作品に「雁塔聖教序」などがある。譜は善の異体字。参考・下野健児 二〇〇七「褚遂良・雁塔聖教序」書字書道史学入会編『日本・中国・朝鮮書道史年表事典』(改訂版)菅原書房 p.174

昭陵原書 真跡の蘭亭叙のこと。

穎州 蘭亭叙の穎上本(井底本、思古齋本)のこと。宇野雪村『法帖事典』によれば、明・嘉靖八年(一五二九)に穎上の井戸の底から出た石の一面に黃庭経、裏面に蘭亭叙が刻され、思古齋石刻の題字があるが、米芾の臨書という見解もあるという。穎上本の図版は、伊藤滋「墨法帖名拓選 王羲之・蘭亭序」(芸術新聞社、二〇〇八)などで見られる。

飛越 飛び上がること。『文選』劉琨・勸進表「承問震惶、精爽飛越。」とあり、劉良の注に「飛越、猶飛揚也。」とある。

無心 佛教語。邪念がないこと。唐・修雅「聞誦・法華經・歌」に「我亦當年學空寂、一得無心使休息。」とある。

仙趣 優れた趣。

雙 變の異体字。双子。『説文』「二乳兩子也。」

定武刻汴中本 定武本のこと。定武本は唐の太宗が王羲之の真蹟を入手し、侍臣に命じて臨模させた際、欧陽詢のものが最も良かったので、石に刻し、長安の學士院に設置したもの。定武本は、蘭亭序の拓本中、古来最も優れ

たものとされる。五代後梁の時に汴都に移され、五代の石晋の乱に及んで、耶律德光が石晋を撃つた際、定武本の刻石が汴都から北方に持ち去られ、殺虎林（河北石家庄）に棄てられた。後の北宋・慶曆年中に李学究が定武軍（河北定州）でその刻石を発見。定武本の名は、発見された「定武軍」に由来する。

虞山錢牧齋 錢謙益（一五八二―一六六四）のこと。字は受之、号は牧齋。江蘇常熟の人であり、虞山はこれを指す。万曆三十八年進士。明清両朝に仕える。吳偉業・龔鼎孳らとともに江左の三大家と称される。

驚賞 驚き賞賛すること。宋・何遠「春道紀聞暨氏女野花詩」に「暨氏女子、十歲能詩、人令賦野花詩……觀者雖加驚賞、而知其後不保貞素、竟更數夫流落而終。」とある。

柳 柳の異体字。

柳賈 柳賈（一二七〇―一三四二）のこと。字は道伝、浦陽の人。元に仕え、官は国史院編修官に至る。宋濂『浦陽人物記』巻下によれば、楷書、篆書を良くしたという。

鄧文原 鄧文原（一二五八―一三二八）、字は善之、浙江杭州の人。集賢直学士、嶺北湖南道肅政廉訪使を歴任。諡は文肅。著に『巴西集』がある。書は二王、李邕を法とした。参考：福本雅一「一九八五」鄧文原」中田勇次郎（編）『中国書體体系 第八卷・元二』二玄社 p.347

傾圮 倒れる。崩れる。『水滸傳』第一〇八回「軍士爭先上橋、登時把橋擠踏得傾圮下來。」

煤塵 煤はすす、塵はごみ。

剝施 連綿と続いて絶え間ないさま。漢・揚雄『法言』吾子「觀畫者、譬諸觀山及水、升東嶽而知眾山之剝施也。」

昭陵帖 真跡の蘭亭序のこと。

過半 半分を超えること。『易経』繫辭下「知者觀其象辭、則思過半矣。」

3 跋化度碑

此冊歐書、較皇甫君碑、醴泉銘稍用矜嚴、神氣融和、譬之駟軫展塗、鞞也者、利于轉焉。雖不犇驟、如琴之轡、操之不失、其諱御者乎。

化度碑に跋す

此の冊の歐書は、皇甫君碑、醴泉銘に較ぶるに稍や矜嚴を用ひ、神氣融和す、之を軫（くるま）を駟り塗（みち）を展（ひら）くに譬ふれば、鞞なる者は、轉するに利あり。犇（はし）り驟（はし）るにあらざると雖も、琴の如く之れ轡（たづな）ひき、之を操りて失せざれば、其れ諱御者なるか。

歐陽詢の化度寺碑は、皇甫誕碑、九成宮醴泉銘より少し嚴格な風格であり、神秘さが融和している。このことを、車を走らせて道を行くことに例

えると、車軸が回転に優れた働きをするようなものであり、それ自身は疾走しないが、轡の操り方が琴の演奏のように調和して、うまく馬車を走らすことができるのであれば、それは良い御者であろうか。

注

跋化度碑 『擬山園選集』(文集) 卷三十八・題跋一に収録。化度碑は「化

度寺邕禪師塔銘」(化度寺碑)のこと。中田勇次郎氏によれば、化度寺碑

は随唐から宋代に渡り実施された仏教の一種の三階教の高僧邕禪師を葬った舍利塔の銘文であり、貞観五年(六三二)長安の終南山の鳴鳴阜に建立された。拓本によってのみ伝わり、原石拓本としては敦煌本のほかに、王孟揚本、陳彦廉本、吳門繆氏本がある。宋翻刻本では顧氏玉泓館本、翁氏蘇齋本、朱笥河本、王龔州第一本、王龔州第二本、鮑氏本、楊守敬、望堂金石初集所載本などがあり、全て同石である。他の翻刻本として、清内府本、横石本、直石本、薛衡本などがある。化度寺碑は九成宮醴泉銘との

是非を問われるほどの地位の名品であるという。参考：中田勇次郎責任編集『豪華普及版 書道藝術 第三卷』(中央公論社、一九七五)

皇甫君碑 皇甫誕碑のこと。中田勇次郎氏によれば、皇甫誕碑は、随王朝に仕えた忠臣として知られる皇甫誕の碑である。陝西省西安に現存。立碑は貞観六年以後、欧陽詢の没する十五年までの間であるとされる。皇甫誕碑は欧法の入門に適しているといわれるという。参考：前掲『書道藝術 第三卷』

醴泉銘 九成宮醴泉銘のこと。須羽源一氏によれば、隋の文帝が造宮し

た仁寿宮を、唐の太宗が改修して名を九成宮と改めた。後に高宗の代で万年宮と改名される。貞観六年、太宗が夏に九成宮へ避暑するために赴き、太宗が皇后と離宮内を散歩した際、偶然に西方の離宮内の一隅に潤いがある所を発見し、杖でつつくと、綺麗な水が湧き出た。これは唐の帝室の徳に應ずる一大祥瑞であるというので、これを記念するための碑を建てることを命じ、作らせたものが九成宮醴泉銘である。欧陽詢唯一の奉勅書であ

り、七十七歳の時の作品であるという。参考：前掲『書道藝術 第三卷』

矜嚴 嚴肅。

神氣 不思議な気。『禮記』孔子閑居「地載神氣、神氣風霆、風霆流形、庶物露生、無非教也。」とあり、孔穎達の疏に「神氣、謂神妙之氣。」とある。

融和 混じり合うこと。唐・李商隱「為表懿無私祭薛郎中文」に「靈臺委

鹽、虛亮融和。」とある。

軫車。

駟 驅に同じ。『玉篇』に「同驅。」とある。

塗道。『廣韻』に「塗泥也、路也」とある。

轂 車輪の輻が集中する中央部分。『周礼』冬官・考工記「轂也者、以為利

轉也。」

奔 奔の古字。『集韻』に「奔古作奔。」とある。

琴之轡 この語の典故は、『詩経』小雅・車牽「四牡駢駢、六轡如琴。」（雄

馬四頭立ての馬車は止まらず進み、御者が操る六本の手綱の手綱捌きは琴の演奏のように調和している。）集伝「如琴、謂六轡調和如琴瑟也。」である。六轡は、四頭の馬に付けた手綱。『詩経』秦風小戎「四牡孔阜、六轡在手。」孔穎達疏「四馬八轡、而經傳皆言六轡、明有二轡當繫之。馬之有轡者、所以製馬之左右、令之隨逐人意。驂馬欲入、則偏於脅驅、內轡不須牽挽、故知納者、納驂內轡繫於軾前、其繫之處以白金為釧也。」

蕭御者 優れた御者。『韓非子』外儲說右下・第三十五「王良、造父、天下之善御者也。」

4 跋北海孫奉常藏歐陽修蘇東坡墨跡

北海呂蘇手書、令人審定、凡書巨濃重、所巨重在人乎、不在人乎。人重則天器之說也。歐、蘇巨直諫、為宋室爭大事、不顧扒糺、不論夷險、其方勁邁俗之骨力、豈待寸筆墨文字哉。即筆墨可見公于毫楮間、矧當時之親炙也。呂羹巨膺、謂書畫為細娛者、未可言書畫者也。北海首肯、不厭斯語。時丙戌春三月雨後跋。

北海孫奉常藏歐陽修蘇東坡墨跡に跋す

北海 蘇の手書を曰て、人をして審定せしむるに、凡そ書は濃を曰て重しとするも、重しとする所曰は人に在るか、人に在らざるか。人重ければ則ち天器の説なり。歐、蘇は直諫を曰てし、宋室の為に大事を争ひ、扒糺を顧みず、夷險を論せず、其の方勁邁俗の骨力は、豈に筆墨の文字を待たんや。即ち筆墨は公を毫楮の間に見るべくして、矧（いは）んや當時の親炙

するをや。羹（あつもの）を旨てし麿を旨てし、書畫を謂ひて細娯と為す者は、未だ可（よ）く書畫を言ふ者ならず。北海管肯し、斯の語を厭はず。時に丙戌春三月雨後に跋す。

孫承沢は蘇東坡の書作品を私に鑑定させた。一般的に書は法を尊重するが、尊重する理由は人にあるのだろうか、人にはないのだろうか。人を尊重するのであれば、生まれながらの本性が書法を決定するという論である。

歐陽修、蘇東坡は率直な諫言で宋王朝のために国家の重要な問題について論争し、既存の在り方をかき乱すことになることも顧みず、問題の困難であることも気にしなかった。その品行方正で力強く世俗を超越した骨力は、書作品の文字にそれが現れているのを見るまでもない。すなわち、書作品は紙の上に彼らの人品を見ることが可能なものであり、まして当時の彼らに親しく接した人なら尚更彼らの人品を理解していただろう。野菜や肉のスープといった味わい論で書畫を語ったり、愛憎といった愛情論で書畫を語ったりして、書畫を娯楽だと言う者は、いまだ書畫を論評するレベルに

到達していない。孫承沢はうなずいて、私の言葉を気に入ってくれた。順治三年（一六四六）春三月雨後に跋を記す。

注

北海孫奉常藏歐陽修蘇東坡墨跡 『擬山園選集』（文集）卷二十八・題跋一

に収録。北海孫奉常は孫承沢のこと。孫承沢（一五九二―一六七六）、字は

耳北、耳伯。号は北海、退谷。直隸大興の人。崇禎四年の進士。明清両朝で仕え、清では吏部左侍郎となる。収蔵をよくした。著作に『庚子銷夏記』、

『聞者軒帖考』、『天府広記』、『春明夢餘録』などがある。参考：福本雅一

一九八六「孫承沢」中田勇次郎（編）『中国書論大系 第十四卷・清四』二

女社 p.286

歐陽修 歐陽脩（一〇〇七―一〇七二）、字は永叔。吉州廬陵の人。号は醉

翁。六一居士。仁宗の天聖八年の進士。直言のため何度も左遷させられる。

嘉祐六年に参知政事となり、神宗後に兵部尚書となるが、王安石の青田銭

に反対し、太子少師を最後に政界から去る。著作に、『新唐書』、『新五代

史』などがある。参考：日原利国一九七六「歐陽脩」中田勇次郎（編）

『中国書論大系第六巻・宋三』二玄社 p.385

蘇東坡 蘇軾（一〇三六・一一〇二）、字は子瞻。号は東坡居士。眉州眉山

の人。嘉祐二年の進士。神宗期、旧法党と新法党との抗争では、旧法党を

支持したが、党争に敗れた後に地方官に落とされる。また後に筆禍で投獄

される。哲宗期には、翰林学士などを歴任する。その後も左遷と中央への

復帰を繰り返す。蔡襄、黄庭堅、米芾らとともに宋の四大家と称される。

参考：中田勇次郎一九七六「蘇軾」前掲『中国書論大系第六巻・宋三』

二玄社 p.391

北海 前述の孫承沢のこと。

呂 以の異体字。

手書 筆跡。『史記』孝武本紀「有識其手書、問之人、果偽書。」

審定 よく調べ判断を下すこと。『史記』張儀列傳「臣聞之、積羽沉舟、群

輕折軸、衆口鑠金、積毀銷骨、故願大王審定計議、且賜骸骨辟魏。」

凡書曰灑灑、所曰重在人乎、不在人乎。 宋晁補之『雞肋集』「學書在法、其

妙在人。法可以人人而傳、而妙必其胸中之所獨得。」とある。

灑 法の異体字。

乎 乎の異体字。

天器 天性。『淮南子』説山訓に「人有嫁其子而教之曰、爾行矣、慎無為善。

曰、不為善、將為不善邪。應之曰、善且由弗為、況不善乎。此全其天器者。」

とあり、高誘の注に「器猶性也。孟子曰人性善、故曰全其天性。」とある。

直諫 直言して諫めること。『孔子家語』辯政「孔子曰、忠臣之諫君有五義

焉。一曰譎諫、二曰巔諫、三曰降諫、四曰直諫、五曰風諫、唯度主而行之。」

争 争の異体字。

大事 重要な政事。『史記』絳侯周勃世家「勃為人木彊敦厚、高帝以為可屬

大事。」

扒 擊つこと。

糺 治および乱の異体字。

夷險 平らかさと険しさ。また、困難なこと。晉・陶潛「五月旦和戴主簿」

に「遷化或夷險、肆誌無亢隆。」とある。險は險の異体字。

邁俗 世俗を超越すること。『世說新語』文學「初、注莊子者數十家」で劉

孝標の注が引く「向秀別傳」に「秀與嵇康、呂安為友、趣舍不同。嵇康傲

世不羈、安放逸邁俗、而秀雅好讀書。」とある。

骨力 意気盛んで力強い書風。『晉書』王獻之傳「時議者以為羲之草隸、江

左中朝莫有及者、獻之骨力遠不及父、而頗有媚趣。」

筆墨 書作品。漢・王充『論衡』亂龍「子駿漢朝智囊、筆墨淵海。」墨は墨

の異体字。

毫楮 筆と紙。宋・蘇軾「書鄒陵王主簿所書折枝」詩之二「若人富天巧、

春色入毫楮。」

親炙 ある人に親しく接して感化を受けること。『孟子』盡心下に「非聖人

而能有是乎。而況於親炙之者乎。」とあり、朱熹の集注に「親近而熏炙之

也。」とある。

羹 肉や野菜に味付けて汁を多くして煮た物。

膾 膾の異体字。

細娛 遊び戯れる。『漢書』賈誼傳「今不獵猛獸而獵田鼠、不搏反寇而搏畜

菟、翫細娛而不圖大患、非所以為安也。」

首肯 頷いて同意すること。宋・蘇軾「司馬溫公行狀」に「時仁宗簡默不

言、雖執政奏事、首肯而已。」とある。肯は首の異体字。

5 跋柳書 柳誠懸用曹娥、黃庭小楷灑拓為大、力勁氣完、矩其陰陽于羲子獻、但似

刀割塗加四隅耳。茲帖與沂州皆其特達者、謂為國工不虛。

柳書に跋す

柳誠懸は曹娥、黃庭の小楷の灑を用み、拓（ひら）きて大と為し、力勁

（つよ）く気完く、其の陰陽を羲に於ひて獻に於ひて矩とするも、但だ刀

割の四隅に塗加するに似たるのみ。茲の帖と沂州とは皆な其の特に達する

割の四隅に塗加するに似たるのみ。茲の帖と沂州とは皆な其の特に達する

者にして、謂ひて國工と為すも虚（むな）しからず。

柳の異体字。参考：日原利国 一九七八「柳公権」中田勇次郎（編）『中国書論大系 第三卷・唐二』二玄社、三〇一頁。

柳公権は王羲之の孝女曹娥碑、黄庭経といった小楷の書法を用い、文字を拡大し、力強く気力が充実している。その筆法は王羲之・王献之に則っているが、字の四隅に刀で切ったような形を加えているようだ。この帖と沂州普照寺碑とは共に特に優れたものであり、王朝を代表する書家と言っても偽りではない。

曹娥 王羲之の孝女曹娥碑のこと。角井氏によれば、孝女曹娥碑とは、後漢・漢安二年、溺死した父を想い十七日間にも渡り川辺を哀吟徘徊し、遂に江水に身を投げ、五日後に父を抱いた状態で浮上したという十四歳であった孝女曹娥を讃えたもので、元嘉元年に度尚が弟子邯鄲淳に命じて作らせた。しかし、邯鄲淳が作った碑は残らず、この碑を書いたというものが南宋になって初めて刻され、明代以降、次第に王羲之の書に擬せられるようになったという。参考：角井博「魏晋唐小楷集」〔『中国法書ガイド十一』

注

跋柳書 『擬山園選集』（文集）卷二十八・題跋一に収録。

魏晋唐小楷集』所収二玄社、一九九〇）

柳誠懸 柳公権（七七八・八六五）、字は誠懸。京兆華原の人。元和初年の進士。宣宗の時に、官が工部尚書となり、後に太子太保を以て政界を退く。

黄庭 王羲之の黄庭経のこと。角井氏によれば、黄庭経とは、道家の修養法を説いた経典。王羲之が書写したとされるものは黄庭外景経。羲之は黄庭経を山陰の道士に与えて鸞鳥と交換したとされ、この出来事に由来して

穆宗が用筆の法を問うた際、柳公権は「用筆は心にあり、心正しければ則ち筆正し」と答え、筆法に託して穆宗に対する諫言を述べたという。柳は

黄庭経は換鸞経とも称す。作品は梁代では行方不明であったが、唐代前期

には内府が所蔵していたらしく褚遂良『王羲之書目』の正書第二に挙げられている。しかし、安史の乱で真跡は失われ、伝存しているものは臨模本や宋拓以下の刻帖であるという。参考：角井博『魏晉唐小楷集』（『中国法書ガイド十一 魏晉唐小楷集』所収 二玄社、一九九〇）

小楷 字体の小さい楷書。

拓 劉正成『王鐸書法評伝』（『中國書法全集 第六十一卷』所収、榮寶齋出版社、一九九三年）によれば、「拓」は「模倣」であり、原形を失わずに模写しつつ、拡大することであるという。また、許洪流『技与道』（浙江人民美術出版社、二〇〇〇）では、「拓而為大」という語は、王鐸の用筆の秘密を暴露しており、彼は「拡大」という意味ではなく、「拡大」は「誇張」であり、「強化」という意味なのであるという。鄧建民『王鐸草書研究』（厦門大学出版社、二〇一六）では、両者の見解を踏まえ、もしその本来の意味にこだわらなければ、諸々の王鐸書法の実情を考慮すれば、両者の解釈はちょうど具合良く、王鐸が臨書する際の2つの力点である「拡大」「誇張・強化」が、『淳化閣帖』中の尺牘作品の拡大であり、その筆意や筆勢に対する誇張や強化であることを説明したと考える、としている。

陰陽 天地間に存在する万物を構成する二気。ここでは、風格か。『易経』繫辭上「陰陽不測之謂神。」

四隅 至るところ。四方。『淮南子』原道訓に「經營四隅、還返於樞。」とあり、高誘の注に「隅、猶方也。」とある。

沂州 柳公権の書を集字した沂州普照寺碑のこと。別名は集柳碑。金代・熙宗四年（一一四四）の時、普照禪寺の覚海が寺院の拡張と修繕を行い、仲汝尚に沂州普照寺碑の撰文及び揮毫を依頼しつつ、苦勞して柳公権の墨跡を収集したという。西安碑林に存在する玄秘塔碑が西柳と称されるのに対し、沂州の集柳碑は東柳と称される。

特達 特別優れている。達は達の異体字。南朝・宋・劉義慶『世說新語』言語「此子珪璋特達、機警有鋒」。

國工 国の名工。『周禮』考工記輪人に「故可規、可萬、可水、可縣、可量、可權也、謂之國工。」とあり、鄭玄の注に「國之名工。」とある。

6 跋米元章上白夢帖

丙戌春三月、始得見海嶽墨跡于淝水龔奉常齋、紙色黯破、首缺數行、中首錯簡、字大如胡桃、計數六百。世傳米帖無墨本、奉常謂北都兵火、宋元

手跡内府尚多、俱散逸矣。海岳書臨終自焚、故其書人愛借、寶藏之。書于晉人晉功、如飛仙御風、得蘭亭、聖教逸意、邁宋一代。此冊尤其晚季筆、慧日峰錄一卷龍井方圓菴、同一丰韻。噫、此特海岳一體耳。予見見内府米眞跡書啓約千餘字、洒落自得、解脫二王、莊周癡中、不知孰是真、玩之令人醉心如此。凋殘灰燼之餘、它俱漫漶、不可究詰。告癡禪文反似晉繫于輕重之數、而鬼神恪護、經三百季始一燬燬人間。不出于熾盛之旨、乃出于兜鍪鞞弣火烈瓦礫之後、令人撫卷興感、况内府貯文、上世古書、龍文典冊、晉巷肆未闕、予未經見、所宜愛借寶藏、不讓天球河圖、晉圖圖于此者乎。其興感可勝道歟。奉常博學、雅能詩、其愛借非徒玩好也。奉常不徒晉功海岳、且晉功晉人矣。

米元章の告夢帖に跋す

丙戌春三月、始めて海嶽墨跡を肥水の龔奉常の齋に見るを得たり、紙色黯破にして、晉は數行を缺き、中に錯簡有り、字は大きく胡桃の如く、六百を計(かぞ)へ數ふ。世傳の米帖に墨本無し、奉常謂はく北都の兵火に、宋元の手跡は内府に尚ほ多きも、俱に散逸す矣、と。海嶽の書は臨終に自焚す、故に其の書は人之を愛借し寶藏す。書は晉人に于いて功育り、飛仙の風を御するが如く、蘭亭、聖教の逸意を得、宋一代に邁(す)ぐ。此の冊は尤も其れ晩季の筆にして、慧日峰錄一菴、龍井方圓菴、同一の丰韻なり。噫、此れ特(た)だに海岳の一體なるのみならんや。予は内府の米眞跡書啓約千餘字を經見するに、洒落自得し、二王に解脫し、莊周の癡の中、孰れか是れ眞の蜚(ちよう)かを知らず。之を玩ぶに人をして醉心しむること此くの如し。凋殘灰燼之餘、它は俱に漫漶し、究詰すべからず。告癡禪文反つて輕重を之れ數ふるに繋がる育るに似たり、而して鬼神恪護、

又三百季を經て始めて一たび人間に燬燬す。熾盛の旨(とき)に出でずして、乃ち兜鍪鞞弣火烈瓦礫の後に出不ず、人をして卷を撫で興感させしむ。況んや内府の貯文、上世の古書、龍文典冊は、巷肆に未だ闕せず、予は未だ見るを經ざる育り、宜しく愛借寶藏すべき所にし、天球河圖の、此れに圖圖する者育るに譲らざるか。其の興感は道(い)ふに勝ふべけんや。奉常は博學にして、雅(はなは)だ詩を能くし、其の愛借は徒だ玩好することに非ざるなり。奉常は徒だに海岳に功育るのみならず、且つ晉人にも功育り。

順治三年春三月、ようやく米芾の墨跡を肥水の龔鼎孳の書齋で鑑賞する機会を得た。紙の色は真つ黒で、最初の部分が數行存在せず、中に錯簡がある。字は胡桃のように大きく、総計六百字ある。伝存する米芾の書作品に墨本は無く、龔鼎孳は「北京の戦火により、宋元の書作品は内府にまだ多くあったが、全て散逸してしまつた。」と述べた。米芾は死の間際に自身の書を燃やしたために、米芾の書の人々は愛借して、これを宝物とする。米芾の書は晉人を学んだことで功績があり、空飛ぶ仙人が風を自在に操るかのよう、王羲之の「蘭亭序」「集字聖教序」の非凡な趣を得ており、宋代における卓越した書家である。米芾のこの作品は特に晩年のものであり、「方圓菴記」と同一の優美な風格である。ああ、この作品はただ米芾の一つのスタイルと言うだけではない。私は内府の米芾の眞跡尺牘の約千字を見たことがあるが、洒脱で自得し、王羲之・王獻之の書風に基づいて悟りに到達しており、莊子が夢の中で、眞なる存在が莊周自身なのか、胡蝶なのか分からなくなつたように、二王の書風と一体化している。米芾のこの作品を見ることで、人はこのように酔いしれてしまうのである。明朝宮廷所蔵の宝物が毀損し灰燼に歸した後、米芾作品も損壊し、その本質を究

明することが出来なくなった。ところが、米芾「天衣禪師碑」は、かえって米芾作品の重要さを判断することに繋がるものがあるようである。そして、鬼神がこの法帖を惜しみ守って、五百年の時を経てようやく出現し光り輝いた。国家が繁栄しているときは現れず、戦乱の後に現れたことで、人にこの巻を撫で興奮感動させるのである。まして内府に保管されていた文書、過去の貴重な書物、優れた書体の重要な書籍は、巷の書肆でまだ刻されておらず、私もまだ見る機会を得ていないものがある。こうした愛惜宝蔵すべきものであって、『尚書』に記載された天球（古代の宝玉）や河図（黄河から出現した瑞祥の図）のような、これに一億倍する価値のものが存在するのにひげをとらないと言えようか。その興奮や感動を説明することはできないといえようか。龔鼎孳は博字であり、素晴らしく詩を詠むことに長け、その愛惜は単なる鑑賞・愛好だけにとどまらない。龔鼎孳は米芾に対して功績があるだけでなく、その上に晋人に対しても功績があるのである。

注

跋米元章告夢帖 『擬山園選集』（文集）卷三十八・題跋一に収録。告夢帖とは、米芾「天衣禪師碑」のこと。

淝水襲秦常 龔鼎孳のこと。字は孝升。合肥の人。崇禎七年の進士。清朝初期の著名な詩人で、江左三大家の一人。『清史稿』卷四百八十四に伝記がある。

海岳書臨終自跋 明・何良俊（一五〇六一—一五七三）『語林』（四庫全書本）

卷十五・雅量第七には「米元章、晩年學禪有得。卒於淮陽軍。先一月區處家事、作親友別書、盡焚其所好書畫奇物。」とあるが、明・陳繼儒（一五五

八一—一六三九）「米襄陽志林序」（四庫全書本・明・賀復徵『文章辨體彙選』卷二百九十三）には、「公沒於淮陽軍、先一月、盡焚其平生書畫」とあり、こちらを踏まえている。ただし、明・范明泰編『米襄陽志林』（北京国家図書館所蔵明版）卷十二・雜紀では、『語林』と同じく「盡焚其所好書畫奇物」とする。

愛惜 大切にする。漢・朱浮・為幽州牧與彭寵書「臨人親職、愛惜倉庫。」

寶藏 宝物。『周禮』地官鄉大夫「登於天府」漢・鄭玄注「天府、掌祖廟之寶藏者。」

飛仙 飛ぶことができる仙人。『海内十洲記』方丈洲「蓬萊山」周廻五千里外別有圓海繞山、圓海水正黑、而謂之冥海也、無風而洪波百丈、不可得往來……惟飛仙有能到其處耳。」

蘭亭 王羲之「蘭亭序」のこと。

聖教 王羲之「集字聖教序」のこと。

逸意 優れた意。

慧日峰錄一菴 『珊瑚網』卷二十四に記載される陸深の跋文中に「慧日峰錄一菴」の語が見られる。米芾「方圓菴記」の末に、「元豐癸亥四月九日慧日峰守一記。」と記されている。米芾の行書作品「方圓菴記」のことか。

龍井方圓菴 米芾の行書作品「方圓菴記」のこと。董其昌「畫禪室隨筆」

卷一に、「補龍井記書後」がある。藤原有仁によれば、米芾のこの碑は「清芬閣米帖」続刻之二に刻されているという。参考：藤原有仁（詠）「画禪室隨筆」中田勇次郎（編）『中国畫論大系』第十卷・明二（二玄社、一九九〇）

丰韻 優美な姿形。元・曾瑞「留鞋記」第一折「想姐姐這般丰韻、自然有個俊俏的郎君作對哩。」

洒落 洒は灑の異体字。洒脫「南史」蕭子顯傳「子顯風神灑落、雍容閒雅

簡通賓客、不畏鬼神。」

自得 得は得の異体字。心に悟ること。『禮記』中庸「君子無人而不自得焉。」

解脫 仏教語。悩みといった煩惱の束縛から解放され、自由の境地に到達すること。北魏 楊衒之『洛陽伽藍記』正始寺「求解脫於服佩、預參次於山垂。」

莊周夢中、不知孰是真蝶 『莊子』齊物論に「昔者莊周夢爲胡蝶。栩栩然胡蝶也。自喻適志與。不知周也。俄然覺、則遽遽然周也。不知、周之夢爲胡蝶與、胡蝶之夢爲周與。周與胡蝶、則必有分矣。此之謂物化。」とある。

醉心 心を寄せる。唐 韓愈・祭裴太常文「朝廷之重、莫過乎禮、雖經策具存、而精通蓋寡。自郊丘故事、宗廟事宜、大君之所旁求、丞相之所卒問、羣儒拱手、宗祝醉心。」

凋殘 衰微。『後漢書』樊宏傳「伏見被災之郡、百姓凋殘、恐非賑給所能勝贍、雖有其名、終無其實。」

灰燼 燃殻。三國 魏 曹冏『六代論』「宗廟焚為灰燼、宮室變為秦敷。」

漫漶 識別し難い。唐 韓愈「新修滕王閣記」「於是棟樑梁桷板檻之腐黑撓折者、蓋瓦級甃之破缺者、赤白之漫漶不鮮者、治之則已、無侈前人、無廢後觀。」

究詰 考証する。『新唐書』陸贄傳「朝廷含糊、未嘗究詰。」

鬼神 死者の靈魂。『易』謙「鬼神害盈而福謙、人道惡盈而好謙。」

恪謹 護は護の異体字。物惜しみ守ること。

煜燁 光り輝くようす。明 劉基・為杭州鄭善止題蓬萊山圖「鍾山燭龍在其北、兩眼燁煜如朝暉。」

人間 世俗社会。『史記』留侯世家「願棄人間事、欲從赤松子游耳。」

熾盛 国家が繁栄している。漢 王充『論衡』超奇「文章之人、滋茂漢朝者、乃夫漢家熾盛之瑞也。」

兜鍪 兜は兜の異体字。古代の兵士が着用した兜のこと。『東觀漢記』馬武傳「身被兜鍪鎧甲、持戟奔擊。」

鞬拊 鞬は弓袋。『説文』「弓衣也。从韋長聲。」拊は矢を射るとき、左手で弓を握る部分。ゆみづか。『廣韻』「拊、弓弣中也。」

火烈 火の勢いが激しい。『左傳』昭公二十年「夫火烈、民望而畏之、故鮮死焉。」

興感 興奮感動する。

上世 大昔。『商君書』開塞「上世親親而愛私、中世上賢而説仁、下世貴貴而尊官。」

典冊 ここでは重要な書籍の意味か。『左傳』定公四年「備物、典策、官司、彝器。」楊伯峻注「典策謂典籍簡冊。」

剗 刻刀。『廣韻』「刻刀。」

天球河圖 天球は玉の名称。『書經』顧命「大玉、夷玉、天球、河圖、在東序。」孫星衍注引鄭玄曰「天球、雍州所貢之玉、色如天者。」又引馬融曰「球、玉磬。」

屬屬 一億倍。屬は萬の異体字。

博學 学識が深く広いこと。『論語』子罕「大哉孔子。博學而無所成名。」

玩好 鑑賞と愛好。『周礼』天官大府「凡式貢之餘財、以共玩好之用。」

7 跋停雲館米帖（跋米海岳天馬賦）

丙戌春過北海齋、觀米海岳天馬賦、矯矯沈雄、變化於獻之、柳、虞、自爲伸縮、觀之不忍去。噫、兵燹之餘、一時文獻凋剝、乃僅存、此卷光怪陸離、不滅沒於瓦礫。物之遭、由蹇遇亨、可勝歎耶。北海孫公雅嗜古博通、海岳何不幸、嘉書經戎行、何幸出之家弭餒、登之君子之堂、逢北海為異代知己也。天下事盛衰顯晦、豈不有數存乎其間乎哉。予不意今年復見北海又復觀海岳及諸家字畫、疇謂予顛沛後非幸歟。孟津王鐸。

停雲館米帖に跋す（米海岳天馬賦に跋す）

丙戌春北海齋を過り、米海岳の天馬賦を觀るに、矯矯沈雄にして、獻之、柳、虞に變化し、自から伸縮を爲す、之を觀て去るに忍びず。噫、兵燹之餘、一時の文獻凋剝するも、乃ち僅かに此の卷を存す、光怪陸離として、瓦礫に滅沒せず。物の遭ふや、蹇由りして亨に遇ふは、歎するに勝ふべけんや。北海孫公は雅（つね）に古を嗜み博通にして、海岳は何ぞ不幸ならん、嘉書は戎行を経て、何の幸なるか之れを家弭餒より出だし、之れを君子の堂に登らせ、北海に逢ひて異代の知己と爲すなり。天下の事の盛衰顯晦は、豈に數の其の間に存するに有らざらんや。予意（おも）はざりき今年復た北海に見（まみ）えんとは、又た復た海岳及び諸家の字畫を觀んとは、疇（たれ）か謂はん予が顛沛して後は幸に非ざるかと。孟津王鐸。

順治三年（一六四六）に孫承沢の書齋を訪ね、米芾の天馬賦を鑑賞したが、それは勇ましく力強い書であり、王獻之、柳公權、虞世南の書風に基づき変化し、自然な形で伸縮したものである。この作品を見て離れがたくなった。ああ、戦火の余波を受けて、一代の文物が失われることがあったが、なんとこの作品はわずかに残り、不可思議な光を放ち、瓦礫の中でも

滅びることがなかった。物との出会いは、困難の後に上手くいった場合、感嘆に堪えない。孫承沢は普段から古を好み博識であるので、米芾は幸運である。この優れた書は戦乱を潜り抜け、幸いにも武人の手を離れ、君子である孫承沢の書齋に収蔵されることになった。米芾の書は孫承沢と出会ったことで時代を異にする理解者を得たのである。天下の事象における栄枯盛衰や仕官隱逸は、そこに必ず運命が存在している。今年また孫承沢に会い、更に再び米芾や諸家の書画を見ることができるとは思いもしなかった。私が挫折を経たのち不幸になったのではないか、とは誰も言わないだろう。孟津王鐸。

注

跋停雲館米帖 『石渠寶笈』四庫全書本卷二十九・貯御書房二・列朝人・書卷上等に収録（故宮珍本叢刊本では卷三上・列朝人・書卷上等）。この題跋は、米芾「天馬賦」の後に記されている。劉正成によれば、本跋文は故宮博物院所蔵の順治三年に補刻された『停雲館帖』に収録されているという。

容庚『叢帖目』の停雲館帖の項では、王鐸の本跋文は見えない。また、宇野雪村『法帖事典』でも言及されていない。訳注にあたり、『石渠寶笈』を底本とした。容庚『叢帖目』の「三希堂石渠寶笈法帖三十二卷」を見ると、第十五冊に「天馬賦王鐸跋」とある。容庚氏は、天馬賦には署名がなく、後人の臨本であるとしている。また、王鐸は孫承澤の為に跋を題したが、孫氏は知止閣米帖に天馬賦を収めていないとも指摘している。

北海 孫承沢のこと。孫承沢『庚子銷夏記』卷一・米元章小字天馬賦墨跡に「余於乙酉得之。次年王孟津覽斯見之稱歎不已。遂跋數語。」（四庫全書本）

矯矯 勇ましいさま。『詩經』魯頌泮水に「矯矯虎臣、在泮獻賦。」とあり、

鄭玄の箋に「矯矯、武貌。」とある。

沉雄 毅然として力強い。『後漢書』順陽懷侯嘉禧讚「齊武沉雄、義戈乘風」

獻之、柳 虞 王獻之、柳公權、虞世南のこと。

伸縮 伸び縮み。宋・蘇洵「幾策審勢」に「秦有天下、散為郡縣、聚為京

師、守令無大權柄、伸縮進退、無不在我。」とある。

兵燹 戦火。『宋史』神宗紀二「丁酉、詔、岷州界經鬼章兵燹者賜錢。」

凋剝 損害を受ける。明・吳承恩「壽熙公曰潘公八表序」に「中遭凋剝、何

以晚而更繁。少苦遺羸、何以老而翻茂。」とある。

光怪 不思議で奇妙な現象。漢・荀悅「漢紀」高祖紀一「嚙從王媪、武負

貫酒、每飲醉、留寢其家、上瞻見光怪、負等異之。」

陸離 美しく輝くさま。『楚辭』招魂「長髮曼鬢、豔陸離此。」

滅沒 消失すること。『列子』說符「天下之馬者、若滅若沒、若亡若失。」

瓦礫 建物などの壊れた残骸。『呂氏春秋』樂成「禹之決江水也、民聚瓦礫」

蹇 易の六十四卦の一つ。困難。

博通 広く通曉すること。漢・劉向「新序」雜事四「國有博通之士、則人

主尊。」

嘉書 優れた書。

戎行 軍隊。『左傳』成公二年「下臣不幸、屬當戎行、無所逃隱。」

象珥 象牙で飾った弓の末。『詩經』小雅采芣に「四牡翼翼、象珥魚服。」

とあり、朱熹の集傳「象珥、以象骨飾弓弣也。」とある。

倭輶 『詩經』秦風・小戎に「小戎倭收、五豸梁輶。」(兵車は、浅くて短く、

軽便にできている。車の輶の上に曲がった横木には、五段巻きになって、

あざやかな模様がある。)とある。現代語訳は、高田眞治『漢詩大系第

一卷 詩經上』(集英社、一九六六)を引用した。

異代 後世。『文選』班固「幽通賦」に「虞韶美而儀鳳兮、孔忘味於千載

素文信而底麟兮、漢實祚於異代。」とある。

知己 自身のことをよく理解し、評価してくれる人。『戰國策』楚策四「驥

於是俛而噴、仰而鳴、聲達於天、若出金石聲者、何也、彼見伯樂之知己也。」

盛衰 興亡。『易經』雜卦「損益、盛衰之始也。」

顯晦 明暗。『舊唐書』魏臺傳「臣又聞、君如日焉、顯晦之微、人皆瞻仰

照臨之大、何以掩藏。」

顛沛 急につまずいて倒れる。『論語』里仁「君子無終食之間違仁、造次必

於是、顛沛必於是。」

8 跋米仲詔卷

觀仲詔公所書卷、灑力正、鴻龐沉厚、黃離居中、根萬二王、正紳端笏、

必者在口、羣物之兼包、有飛天仙人揮斥八極之勢。有所經、指發所聚而能

如是、通解乎。夫書家多委弱過乎物、得此儀毫、失瘠、良為振起、鍾、張、

皇、索之脈不斷、渾渾噩噩、信震日第一瑰麗也。宜別為篋笥、勿在懷袖

風齒寒雕、恐致湮滅、輕褻此寶。

米仲詔の卷に跋す

仲詔公の書く所の卷を觀るに、灑は力正、鴻龐にして沉厚、黃離は中に

麗(つな)げ、根は二王を萬(のり)とし、正紳の端笏にして、必なる者

は己に在り、羣物を之れ兼包し、飛天仙人の八極を揮斥するの勢有り。經

とする所有りて、聚むる所を指發して能く是(か)くの如ければ、通解な

るや。夫れ書家は委弱にして物に過ぐることも多く、此を得るも毫に儀(の

つと)らば、失(あやま)ち*(や)せん。良く振起を為し、鍾、張、皇、

索の脈は斷たず、渾渾噩噩として、信(まこと)に震日第一の瑰麗なり。

宜しく別に篋笥を為(つく)るべくして、懷袖に在ること勿れ、風に齒(ふ)

れ寒さに雕(か)るれば、恐らくは患滅を致し、此の寶を輕んじ藝(けが)さん。

米万鍾が書いた巻を鑑賞するに、その書法は力強く正統的で、大きな厚みがありどっしりとしている。黄色の太陽が中道に就くように、根源は王羲之・王献之を基本とし、公正な紳士が笏を手に皇帝陛下に上奏するようであり、必要とすべきものは全て自分に備わっている。あらゆる存在を内に包み込み、飛仙が自在に世界の八方の果てに行き着くような勢いがある。手本とするものがあり、蓄積したものを自在に發揮して、このように優れた成果をあげたことは、透徹した理解に達したといえようか。そもそも、書家は臆病さが尋常でなく、手本から一步も踏み出さないことが多く、米万鍾の書作品を入手しても些細なことに拘るならば、過ちを犯し弱弱しい作品になるだろう。この作品は本当に良いものであり、鍾繇・張芝・皇象・索靖の流れを受け継ぎ、雄渾で嚴肅さがあり、本当に我が国第一の独特で華やかな名品である。この作品は、別に箱を作って保管すべきであり、懐に入れて持ち歩いてはならない。風や寒さで劣化したりしてしまえば、字が識別できなくなる恐れがあり、この宝を輕んじ汚すことになるだろう。

注

跋米仲詔卷

『擬山園選集』(文集) 卷三十九・題跋二に収録。米仲詔は米万鍾のこと。米万鍾(? : 1300)、字は仲詔、号は友石など。出自は甘肅省慶陽であるが、北京に寓居する。万曆二十三年(一五九五)の進士。官は大僕寺少卿に至る。また、米芾の末裔であるという。明末の大家である董其昌とともに「南董北米」と称される他にも、邢侗、張瑞圖、董其昌とともに「邢張米董」とも称される。著書に、『澄澹堂詩文集』などがある。

参考：西林昭二『一九九九『書』の文化史(下)』二玄社
瀧 法の異体字。

力正 強い力で勝ち取る。『周禮』秋官禁暴氏「掌禁庶民之暴亂力正者、搗誣犯禁者、作言語而信者、以告而誅之。」孫詒讓正義「正、當讀為徽、言恃強力以相爭取。」

鴻麗 広く華美であること。漢 王充『論衡』自紀「故鴻麗深懿之言、關於大而不通於小。」

沈厚 落ち着いていて穏やかなさま。『晉書』陳壽傳「壽沈厚有智謀。」

黃離 『易経』離に「六二、黃離。元吉。象曰、黃離元吉、得中道也。(六二は、黃離。元吉なり。象に曰く、黃離元吉なるは、中道を得ればなり。)」とある。本田によれば、「黄は土の色。土は五行で中央に当たる故に、中

の色である。六二は内卦の『中』の位に離れているから、黄離という。六二はまた『正』(陰爻陰位)。いよいよめでたい。占つてこの爻を得れば、大善であり、吉である。」という。参考：本田濟一九六六『新訂 中国古典選第一卷 易』朝日新聞社

麗 麗の異体字。

萬 矩に同じ。『正字通』に「萬、與矩同」とある。

羣物 群物。多くの物。

飛天 空を飛ぶこと。唐 李邕・日賦「乍出海而融朗、忽飛天而光大。」

揮斥八極之勢 『莊子』田子方に「夫至人者、上闚青天、下潛黃泉、揮斥八極、神氣不變。(そもそも至人は、上は青天を闚い、下は黄泉に潜り、八極を駆けめぐって、神気はみだれない。)」とある。現代語訳は、倉石武四郎・関正郎(訳)『莊子』(『中国古典文学大系 第四卷 老子・莊子・列子・孫子・晏子』所収、平凡社、一九七三)より引用した。

通解 通曉すること。『北齊書』陳元康傳「性又柔謹、通解世事。」

萎弱 虚弱。軟弱。宋胡仔『苕溪漁隱叢話』宋朝雜記上「此句才送用一字、已覺其萎弱重復、若不勝其長矣。」

失* *は、やまいだれに齎。劉正成は、「膺」とし「小臣」と解釈する。校点本『擬山園選集』（河南人民出版社、二〇一三年）は、「瘠」とする。後者に従った。

振起 勃興。晉・桓溫・薦譙元彥表「方今六合未康、豺豕當路、遺黎匱薄、義聲弗聞、益宜振起道義之徒、以敦流遯之弊。」

鍾、張、皇、索 鍾繇・張芝・皇家・索靖のこと。

疆疆 厳しく正す。漢・揚雄『法言』問神「虞夏之書渾渾爾、商書灑灑爾、周書疆疆爾。」

震旦 中国の異称。古代インド人は中国をチーナスターナ(梵 *Chastana*)、秦の土地の意と称しており、震旦はこれに由来する。『佛說灌頂經』卷六「閻浮界内有震旦國。」

瑰麗 独特で華美なさま。『文選』張衡・西京賦に「攢珍寶之玩好、紛瑰麗以參靡。」とあり、薛綜の注に「瑰、奇也。麗、美也。」とある。

篋笥 物を入れる箱。『禮記』内則「男女不同施衾、不敢縣於夫之種施、不敢藏於夫之篋笥。」

懷袖 懐に入れること。漢・班婕妤「怨歌行」「出入君懷袖、動搖微風發。」

漉滅 はつきりしない。明胡應麟『少室山房筆叢』經籍會通三「書紙半已漉滅、而印記奇古、裝飾都雅。」